

孤蝶と一緒に、横須賀へ女義の東佐を聴きに行つた時も、二人が好い氣持になつて聞いて居ると、其處へ刑事が張り込んだことを發見し、大杉は孤蝶を誘つて飛出したと云ふ話である、處が夫とは氣の付かぬ刑事、樂屋の中へ潜り込み其處に遊んで居た子供に蜜柑などを與へ乍ら「此んな男が來て居無いか」と、徐々詮議に掛ると、無邪氣な子供は「一體伯父さんの尋ねる人は、何んな身の上の人なの」と訊く、刑事も此奇問には當惑して、「左様さね、梅川忠兵衛のやうな男さ」は、振つて居る。」

これは『文壇失敗談』といふ小冊子に載つて居る事柄である。此の話は小生が誰にか話した覺があるのだから、それが如上の話に造くり上げられたのであらうと思ふ。大杉氏に斯ういふ事柄のあつたのは、一昨年の暮から昨年の春に至るまでの間のことであらうと思ふ。従つて、大杉氏が堀安子君と夫婦であつた時分のことであつて、夫婦で逗子に避寒して居た間の事件である。竹本東佐を聴きに行つたのは、大杉氏と僕とでは無くして、大杉氏と堀保子君とであつたのだ。

竹本東佐は、小生の極く古い知人である。大杉氏夫婦も東佐を善く知つて居るのである。大杉夫婦が前に云つた通り、逗子に避寒して居るうちに、東佐が横須賀の某亭へ出ることになつたの

で、或る夜大杉氏は夫婦で東佐を聴きに行つた。(小生は同行したのでは無い)。刑事は始から大杉氏夫婦に尾行して居り、夫婦も無論尾行されて居ることは承知であつたのである。大杉氏夫婦は樂屋へ入つて行つて、東佐に逢ひ、樂屋で聴いて居た。所が、樂屋の入り口が別になつて居たのであるのか、刑事(これは二人位であつたらうと想像される)は、大杉氏夫婦の歸るのを見失つてはならぬと思つたものと見えて、樂屋のことも(これは小兒では無くして、前語りをやる若い娘)を樂屋口まで呼び出して、蜜柑が何かやつて機嫌を取つて置いて、彼のお客が歸る時には是非一寸と知らして呉れと頼んだ。娘は、一體彼の人たちは何ういふ人たちなのかと、刑事に尋ねた。すると、刑事は笑つて、まづ梅川忠兵衛さと云つた。娘たちは、夫では彼の人たちは今にきつと縛られて連れて行かれるに違ひ無い、その様子は何ういふ風だらうといふやうな風に、太く好奇心を以て待つて居たが、一向に縛られさうも無いので、娘たちは待ちあぐねて、東佐に、その話をした。すると、東佐は大笑ひをしながら、大杉氏夫婦は縛られるやうな人では無いことを、娘たちに説明して聞かした。娘たちは、「では、お師匠さん、縛られるのぢやア無いの、では詰まら無いわねえ」と、相顧みて云つた。

小生が大杉氏から聞いたのは大凡この通りである。刑事は相手が義太夫語りの若い娘であるので、梅川忠兵衛と云つたのであらうし、又それが此の話の骨子になつて居るのであるから、此の梅川忠兵衛といふ言葉は、何うしても男と女をいふので無ければならないのである。「失敗談」のやうに、大杉氏と小生即ち男二人を指して云つたとしては、無意味な言葉になるのである。

以上の話は、所謂る危険人物には何ういふ風に刑事が尾行するものであるか、寄席の樂屋とは何ういふ風なものであるか、東佐と大杉氏夫婦の關係は何ういふものであるかといふやうな、さまざまな豫備知識が無いと、十分には解かり兼ねることであるので、或は「失敗談」にあるやうに間違う方が當然のことであるかも知れ無い。

怪力亂神

一

聖人は怪力亂神を語らずといふのであるが、吾々小人に取つては、取り留めの無いやうなことを語るのが、現實の苦痛をば脱却する最も手近な安直な方法である。

相變らず有り觸れた本から、面白さうな話を引いて見る。

古來怪力の人の傳説は随分多いのであるが、戸川肥後守安達の家臣寺尾作左衛門は其比稀なる大力であつた。

或る年、江戸へ行く旅中に、作左衛門の僕と馬子とが口論をしだし、僕が馬子を殴り倒したので、その驛の馬子どもが百人ばかり聚つて、棒を振り廻し、石瓦を投げ、寺尾主従を取り巻いて罵り騒いだ。作左衛門は自分の持槍の長さ二間あまり、周七寸程あるのを、手に取つたが、身の

方で難いで、若し馬子に傷を負はしでもしては、後が面倒だと思つたので、身の方を隻手に握つて、柄の方で馬子どもの脚を拂つた。

すると、一拂ひに十人ばかりづゝ、打ち儘されるので、馬子どもはその勢に恐をなして、皆逃げ散つてしまつた。

此の作左衛門は、平常戯むれに拳を握り腕をさし出すと力瘤が出、筋はまるで篠を束ねたやうになるのであつたが、その時細き裏刺の磨ぎすましたのをば腕の上二尺位のところから落しかけても跳ね反つて、腕には刺ら無いのであつた。

又縁の端に踵をかけて立つて居るところをば人が走りかゝつて、背中を撞いても、宛然磐石を立てたるが如くで、作左衛門の體は少しも動か無かつた。

作左衛門には七兵衛といふ弟があつたが、五斗入の俵一つを口に銜へ、兩の脇に一俵づゝ、脇挟み、尙二俵をば足に穿いて、それで歩くのを見ると、少しも力を入れて居るやうには見えすに、如何にも易々と歩るいて居るのであつた。作左衛門の力は此の七兵衛の力の倍であつたといふのである。

二

寺澤志摩守の家中に、遠山六兵衛といふ者があつたが、これは騎士二十人の頭で、祿千石を領し、近國に聞えた大力であつた。

此の遠山が、周一尺二寸の大竹を兩手で握つて一締め締めるといふと、さしもの大竹が乍ちバリバリと割れる。それをば半分ばかり割つたところで、それからば隻手で後を皆おし割つてしまつた。

或る時、筑前から反橋といふ相撲の上手が唐津へ來たが、力も強いし、手も善く取つたので、足輕、水手などは云ふに及ばず、若手の士中にも此の反橋に勝ち得た者は一人も無かつた。

此の時、遠山は、自分の組下の馬廻、隣家の人々、身近き者どもを、宅に招請して、相撲を催したが、その時も、反橋は三人抜に度々勝つて、笑ひながら引いて入つた。

所が、反橋にばかりさう勝たれるのは如何にも残念なことである。反橋は筑前へ歸つて唐津には相撲の取れる者は一人も無いやうに云うかも知れぬ。是非反橋と一番取つて呉れと、座中から

頻りに遠山に所望があつた。

遠山もそれではといふので、場に出て、両手を舉げて立ち向つて、反橋が潜り入るところを、右の手で反橋の下帯の三結を取り、手をさし延べて振り立てると、反橋の手足更に地に付かず、二振三振して、引擧げて、えいと聲を掛けて投げ付けたが、反橋は宛然蛙を踏み潰したやうな形になつて、鼻血が流れ出て、氣絶してしまつたのを、顔へ水をかけ、氣付薬を與へて、介抱すると、半時ばかりしてやう／＼蘇生はしたのであるが、左の手が折れ、骨がくひちがつてその後全く不具になつてしまつた。

三

同じ寺澤の家中の千賀五助も大力の聞え高き士であつた。

或る年の正月二日例年の通り志摩守が馬揃を唐津の城下で見物して居られる時に、何うしたことであつたか、人に喰ひ付く馬が轡を脱して、駆けて來た。千賀は之を見て、袴の股立を高く取り馬場の中に走り向つて、片膝を突いて待つて居た。

馬は千賀を見て、眼を光らし、牙を叩いて、跳びかゝるところを、千賀は立竝まに馬の平頸を抱き、推し伏せて、膝で平頸を敷き、手を舉げて、馬副(馬丁)を招き、馬の口を割つて轡をはませた。

四

美作の太守森内記長繼の士、高木右馬介は髻が眼の下から胸の毛まで聯つて居て、身長六尺ばかりで、力は五六人力であつた、錢を柱へ當て、押すと、柱の中へ入つてしまふ。高木はさういふ風に四五文づゝ、錢を柱へ押し込むのであつた。

或る時、試めし者を切らうとしたが、刀の目釘の穴が窄くつて、目釘竹は穴一杯になつて入ら無かつた。高木はその目釘竹を取つて目釘穴に當て指でもつて上からぐつと推すといふと、目釘竹の周圍が削つたやうに細つて、目釘穴の裏まで透つた。鐵槌を以つて打つても透るものでは無かるべきを、高木の力實に測り難しと、見る人皆驚嘆したといふのである。

五

大友家の臣原大隅守の話が、一寸と前の遠山六兵衛の話に似たところがある。

原大隅守は豊後の吉野といふところを領し、生得その力常人に勝れて、量り難かつた。

或時肥後國戸口といふところへ、奇代の石火矢五百挺渡來した。所で、その石火矢一挺に人夫數十人か、つて丹生の城へ運んだのであるが、その體如何にも騒がしかつたので、宗麟は大隅守を呼んで、その石火矢を持つて見ろと云つた。大隅守は畏まつて、座敷を立ち、石火矢の筒先を隻手で引き起し、如何にも輕々と肩に載せ、廣場を七八遍廻つてから、元の如くに置いた。

宗麟は尙も原の力の程を試めして見たく思つて、庭前に大きい水鉢のあつたのを幸ひ、その裾りどころが悪いから、直して呉れぬかと原に云つた。原は其儘、袴の裾を高く挟み、兩の手を差伸べて、水鉢を宗麟のいふ通り直したが、鉢の水は一滴も零れず、面色も更らに變ら無かつた。

實に鼎を擧ぐる力とは此の事である。全く我家の寶であると、宗麟は感服した。

「又その頃豊後の府内に勸進角力ありけるに、國中はいふに及ばず、近國に名ある力者共、雲霞

の如く集まりける、又上方より雷、稻妻、大嵐、辻風といふ強力の者下着しける。何れも身長の七尺に餘り、筋太く骨あれて、殊に此の道の妙を得たれば、此者共に手合する程の者一人も無かりしかば、相撲は程無く止みてけり」

其處で、その四人の者どもは大に慢心して、吾々は、既に東國、北國を經廻つて此所まで來たのであるが、今までには吾々の片腕にも足る者は無い、して見れば、九州の力者の力も大抵知れたものである。唯一人大友家に勝れた強力の人があるさうだから、丁度序でもあるし、その人の力の程を見やうと云ひ合せて、臼杵へやつて來たが、折好く原大隅守が丹羽島の自邸に居るといふのを聞いたので、使を以つて、面會を請うた。大隅守が快く承諾したので、四人の者は、たとへ鬼神の變化なりとも、吾々が必死に闘むならば、争でか相撲に負けるものかと、喜び勇み、仲間もの者ども以上八人、大刀を横へ、傍若無人の有様で、大隅守の邸へ押かけて行つた。

原も、是非一番相撲つてみやうとは思つたのであるが、先づ奴等の度膽を抜いた上でといふ考で、相撲どもを座敷へ通し、今一寸と細工を仕か、つて居るところであるから、少し待つて呉れと云ひながら、鹿の角を取り寄せて、それを手で押し折り、摘み碎きなどしながら、話をした。

相撲どもも、大隅守が鹿の角を砕いたのには眼もかけ無い有様で、大隅守の力量は上方までも聞えて居るのであるから、是非お力の程を拜見し度くて参上したのだと云つた。大隅守は、なかなか評判ほどのことは決してないのであるが、折角の御所望であるから、持つて居るだけの力は見せやうが、それは何ういふ方法にしようかと、相撲どもに相談した。相撲どもはそれは吾々と相撲の手合せをして呉れと云つた。

大隅守は、それはいと易いことであるが、自分は相撲といふものを取つたことが一度もないのであるから、一體どうするのだかその方法を話して聞かして呉れと云つた。相撲どもは、斯う云ふ風にするのだと、その方法を教へた。

大隅守はそれでは今支度をするからといつて、一間へ引つ込んだが、暫すると、侍どもが、周圍二尺ばかりもあらうと思はれるやうな大竹を五六本庭上へ擔ぎ込んだ。大隅守が上方の相撲と手合せするといふ取り沙汰が廣がつたので、城下の者どもが大勢見物にと集まつた。

大隅守は、其所へ出て来て、自分は相撲といふものは取るのは生れて始めてであるが、此の竹で土俵とかいふもの、形を拵へやうと云つて、その大竹を手に取つて、一本づつ、末の方から

鼻と掴み拵き、本と末とを一つに捻り合はせ、大きい輪を拵らへ、此輪より外へ足を踏み出した方を負けとすると定めると云つた。

雷、辻風を始め相撲どもは、此の有様を見て大に驚き、吾々どもは、日本國中都鄙遠近至らぬ隈も無い位、方々修行して廻り、相撲道に於ては恐らく大力の譽を取つた者どもであるが、大隅守殿の最前よりの御舉動は、到底人間業とは思はれない位である。これでは、中々吾々が御手合せをするまでも無いことである。もうこれで結構だから御免を蒙ると云つて、恐れ入つてしまつた。

大隅守は大に笑つて、庭上より座敷へ上つたがその時、武宮武藏守といふ天下稀なる大男だといはれて居た大友家一番の大兵肥満の武士が見物に来て居た。武藏守は身の長八尺に餘つた男であつた。所で、此の武藏守と大隅守とが座席の譲り合ひで、間取つて居るうちに、大隅守は兩手を差し出し、武藏守を掌の内に拵ひ上げ、まるで小兒を載せたるが如く、上座の方へ直したので、それも一座の一興になつた。

六

「抑大隅守が力量付きたる謂を尋ぬるに、或時生善寺といへる寺に行きて、日暮れて歸りけるに一村繁りたる藪の陰、さゞれ水の流瀉々として、月さへいと冥かりしに、とある板橋の向を見れば、其の様怪しき女の、懷に子を抱きてぞ立休らひける。大隅元來不敵なる者なりしかば、馬を乗り放ち、唯一人橋板を荒らかに踐み鳴らし、既に間近く歩み寄りし時、彼女喘咽れたる聲音にて、此の子を少しの間抱き給ひてんかと云ひければ、大隅仔細あらじとて、片手には刀の柄を握り、左の手にて嬰子を請取りけるに、重きこと磐石の如し、須臾くありて女立ち歸り、あら嬉しや、此方へ賜はれとて、其子を抱き取り、和殿何にても心中の望はなきかといふ、大隅答へて、我武門に志あれば、天下に雙なき力といひければ、其時女米と思しき物を三粒、是れを食せられよと與へける。

大隅推し戴きて食しける。女又此の外に猶もあるやと問へば、大隅守、さればこそ、我屋敷平生水渴の苦みありと申さる。女打ちうなづき、忽然として姿を見失ひければ、月光晝の如く輝

して林木影明なり。

大隅奇異の思をなし、馬引き寄せ、打ち乗りて歸りける。夫より水渴の患なく、力量心の儘なるこそ不思議なれ」

此の末の話は講釋にはよく出るのであるが、僕は「四國軍記」——本名土佐軍記——の中から引いたのである。

大 力

一

僕の小さい時分には、父や兄から、備後の尾の道の何がし寺の和尚が恐しい強力であつたといふ話をよく聞いたものであつた。

拳固を柱に當ててグツと推すと、木が拳固なりにメリ込んでしまつて、其所へ丁度拳が入つて

しまうやうになつたとか、或る侍が尋ねて行くと、和尚は可なり大振りの銅の火鉢をさも軽るさうに雙手で持つて出て來た。和尚が寸時中座した間に、その侍はその火鉢は何れ程の重量の物だらうかと思つて、持ち上げてみようとしたが、立ち上がつて諸手をかけて、必死の力を揮つても、その火鉢は一寸も動かかなかつたとか、又他の或る侍が和尚の晩年に尋ねて行くと、私ももう年を取りましたから、力業はできません、責めてこれでも記念にお持ち歸りを願ひますと云つて、鐵の火箸を二本合せて、繩の如く釣り合せて、それを呉れたとかいふやうな話であつたことを覺えて居る。

僧には時々大力の者があると見えて、『武將感狀記』にも、左の如き強力の僧の話がある。

松平讃岐守頼重の下に、光顯寺といふ眞言の僧があつた。これは日本無雙の大力であつた。

嘗て、修業の爲めに東國へ赴く時、行手を急ぐが爲めに、深夜に旅宿を出て、人家を離れたところへ行きかゝると、道の傍に嘯強の男が四五人立並んで何か嘯いてゐる聲が聞えた。その年は饑饉であつたので、定めし追剝なのであらうとは思つたものゝ、何うしても通らなければならぬ道であるのだから、用心しながらその男どもの傍を通らうとした。

すると、案の定、その男どもは、もしく和尚さん、路銀を頂き度いもんですねと呼はりながら、光顯寺の前後に立つて遮ぎつた。

光顯寺は、その男どもを引つ摺んで、人礫に打つて投げ殺すのは何でも無いとは思つたものの、それでは出家としての慈心に於ては缺けたことになると思ひ返し、これは何でも驚かして追ひ拂つてしまふのが一番好いと思案して、並木の松の樹圍一尺程なもの、傍へ走りかゝるが早いか、えいと聲を掛けて苦もなく根引にすると、その邊一間ばかり地が裂けて、樹が根ごと抜け出た。光顯寺はその松の樹を手に提けて、烈しく振り廻すと、枝葉が大に鳴つて、まるで大風が松を吹く時のやうであつた。それで、汝等盜賊ども片つ端から徹塵にして呉れるぞと怒鳴り付けるといふと、追剝どもは、これはよも人間ではあるまい、天狗の所業に違ひ無いといふので皆散りくゞに逃げ去つてしまつた。

光顯寺は又或る時馬に乗つて行きながら、道端の七寸周圍程の竹を雙手で根こぎにしたが、それでも馬の足並は常と少しも違はず、少許も力を出した様子は見え無かつた。

或る日、或る禪寺で珍客を迎へるといふので、新に石の手水鉢を据たのであるが、光顯寺は其

處へ見廻りに来て、それを見て、此の手水鉢は裏表になつて居る、これは可笑しいから、据直し
たら宜しからうと云つたけれども、最早亭午の時分であつて、三十人して終日かゝつてやつと据
た位の巨石であるものを、今更何うにも爲やうは無い、何うしたものだらうと、人々が當惑して
居ると、光顯寺は、それでは愚僧が据直して進ぜやうと云つて、黒衣の上に禪を掛け、庭へ下り
て石に手を添へ、さしもの大手水鉢をそろりと推し廻したが、始め三十人かゝつて据た時より隻
に自由に見え、中に八分目程入であつた水が一滴も滾れなかつた。手水鉢はそれで奇麗に向が直
つた。

光顯寺が座に直るといふと、禪僧は、さて、聞きしよりも今現在に見ては尙一層驚かる、
お力である。さりながら、さういふお力をお見せなされると、諸大名から碌千石二千石を與へる
から還俗せよなど、申して來だして、結局は佛道の障碍になるであらう。今手水鉢を据直さうと
云はれてからは、顔色が太くお變りなされて、平常の光顯寺さんの面相では無いやうに見えた。
全く力を出されやうと思はる、氣勢は實に凄まじい體であつた。是又佛心に背いたことである。
一たび出家となつた以上は、力などは全く用の無いものだ。今より後は力業は止められた方が宜

からうでは無いかと云つた。

光顯寺も豁然として悟つて、それより一生力を出すやうなことはし無かつた。

二

サキソニイの選舉侯で、波蘭土王であつたオーグスト二世の大力物語を何かで讀んだことがあ
る。

オーグスト王が、或る日遠乗に出ると、馬の蹄鎧が落ちた。で、村の鍛冶屋へ行つて、蹄鎧を
打つことを命じたが、鍛冶屋が打つ積りで、一つ持つて來ると、王はその蹄鎧は強いか何うか前
以て試めして置かなければならぬと云ひながら、それを兩手に持つが早いか、ボキリと二つに折
つてしまつて、

「イヤ、これは駄目だ」

と、云つた。それからは、持つて來るのも、持つて來るのも、片つ端から、捻ぢ折つてしまつ
た。

鍛冶屋はそれを見て、じつと考へ込んでしまひ、村人は驚き入つて、眼を圓くして、王の顔ばかり見て居た。

そのうちに、王も到頭やつと十分丈夫な蹄鐵にぶつかつたといふやうな顔をして、最後の蹄鐵は折らずに通過させた。

蹄鐵が馬に打たれてしまうと、王は鍛冶屋に代としてテエアラ貨を與へた。

鍛冶屋はそれを指先で撮んで、ぐつと推し曲けて、

「イヤ、これは駄目だ」

と、云つた。で、王が與へるテエアラ貨を續けざまに皆指先で推し曲けてしまつた。

「この金貨は何うだこれなら少し丈夫だらう」

王はルイドル貨を鍛冶屋に渡した。鍛冶屋もそれで満足した。

王は、自分に劣らぬ大力の男を見つけたので甚く喜んだ。

三

正木大膳は『八犬傳』の中では大した役廻を當てられて居ないが、『武將感狀記』の中で、古今の大力の中に數へられて居る。

里見家の家老正木大膳は、里見家が亡びてから、因幡の鳥取へやられた。預人であつたから、國主少將光政は大膳を厚遇した。

大膳は身幹長大、壯力その比等倫すべきもの無く、昔ならば畠山重忠などがさうであつたらうかなど、噂せられる程の男であつた。

鳥取にあつて、退屈の餘り、慰みに、新刃の眉光刀を鍛たはせたが、刃の長さ三尺許、幅廣く、重ね厚く、唯持ち上げるだけでも並の人には容易で無いものであつた。ところが、大膳はその眉光刀の石突を右の指三本だけで持つて、物を斬る眞似して、前後左右へ五十も百も振るのであつたが、まるで細竹でも振るかやうに如何にも軽さうに見えた。

人がその力が何れ程あるのか、何か力試めしをやつて見せて呉れぬかと云つても、大膳は、楚囚の如き今の身にあつては、そんな事をすべきではないと思つたからであつたらうが、決して人前で力業などはしなかつた。

房州に居た時分、六月頃に、壯年の朋友を誘つて納涼の爲めに河邊を逍遙したことがあつたが、暮方になると、戯れに乳だけほどの早瀬に下り立ち、あたりの民家から板戸を一枚取り寄せ、水に逆つてそれを推し上げると、板戸は半ばから折れてしまつたので、これでは水勢に堪へないからといふので、今度は板戸を三枚重ねて、それで川下から推し上つて行くと、水波は左右に分れて川上へ行くこと一二町であつた。見る者舌を巻いて驚嘆した。

四

肥前龍造寺の住人勝山左近も又その力九國に雙ぶ者無しと云はれた程の大力であつた。

常に鐵杖を突いて歩いたが、家へ入る時は、厨のたきへ鐵杖をゆり立ると、土に入ること一尺ばかりで、二三十人してもそれを引き抜くことができなかった。左近は外へ出る時は、それをば雙手で、足をも止めずに、すつと引き抜いて行くのであつた。

刃四尺、柄一丈の薙刀を傍に置き、燈臺の上下二箇所に火をともし、指二本で薙刀の石突を持つて、下の燈火をば切尖にかけ、上の燈火と一緒にして挑けることを慰みにして居た。

その頃、國中に隠れ無き口の強い馬があつて、左近が或る時それを乗つて居るうちに、驀地に駆け出した。引いて留めやうとしたが、馬は口が裂け血が流れ出ても留まらないで、城門を駆け入らうとする。左近は自分の額が上の横木に當つては、大變だと思つたので、手綱を放して、兩手を潜りの横木にかけ、股で以つて馬を一締めしめると、馬は四足を縮めて締め揚げられ、まるで物を吊つたやうな形になつた。

大蛇

一

蛇は、西洋では、人間の始祖アダムの妻エバを誘惑して、人間墮落の基を開いたといふので、聖書の中での大達者になつて居るのであるが、その後の傳説では蛇は更に振つて居無い。

唯邪智深い人間の喩へに引かゝる位なことで、物語の中では更に大した役割を勤めて居無い。

哥薩克の童話の中には神通力のあるやうな蛇が出て来るところがあつたやうに思ふのだが、今生憎く本を借し無くしてしまつたので、確なことは何もいふことができ無い。

露西亞、セルヴィア等の童話の中にはよくツラゴン（龍）が出来るのであるが、これも唯の妖怪といふ意味のものに取れて、別段蛇體のもので無ければならんといふ心持のするものではない。

さうすると、蛇、うはばみ、おろち等に關する傳説は、日本に一番多いやうである。そして、日本のものが一番趣味に富んで居るやうに思はれる。

机邊にある書中から蛇に關する傳説を一つ二つ抜いてみる。

二

『谷千城遺稿』の中に左の如き物語がある。

『先人の昔話を思ひ出し、左に記す。昔日高岡郡上の加江といふ浦に、喜作といふ山獵師あり、頗る強氣の男なり、夫婦暮しなり、晝夜を別たす深山に分け入、猪鹿を獲て生活を爲す、或時山

中にて大蛇に遇ふ、喜作銃に二つ丸を込めて忽ち撃倒す、其大きさ大松の横たはれるが如し、歸りて妻に此事を告ぐ、妻亦女丈夫なり、曰く、聞く大蛇は恩怨深きものなり、今夜或は來り讐せん、油斷すべからず、喜作例の如く銃に二つ玉を込め待ち居たるに、夜半に至りすさまじき音して屋根の上に何か落ちか、れり、喜作窺に戸外に出て屋根の上を窺へば、圍一抱へもあるべき大蛇鎌首を上げ將に喜作を呑んとす、喜作其口中をねらひてドント放つ、何かは以てたまるべき、蛇は家を打越し下の谷へ落ち死したり、此前日殺したる蛇の友なりし也、隣人等喜作に勧め、死體は焼捨て、僧を頼み弔ふべしと云ふも、喜作は物ともせず、打棄置きて顧みず、其蛇腐敗し骨となりしを一節取つて火入れにせりと云ふ、其骨一尺五寸廻りありと云ふ、喜作後ち人と喧嘩して殺害し、歸り、其由を妻に告ぐ、妻曰く、人を殺さば死罪は當然なり、御上の御厄介とならず速に自殺すべしと勸むれば、喜作最なりと同心し、正に切腹せんとす、然るに、人を切りし時力過ぎて切先を石に切付鋒を折たり、研石にて其切先を研ぎ、漸くにして切腹して死したりと云ふ、其勇氣可驚なり、其後は妻は寡居して世を送れり、或時強盜押入、寡婦を強迫し、飯を炊か令めんとす、寡婦は少しも臆せず、今に炊きて喰すべしと云ひて、押入れより例の銃砲を取り出

して、火繩に火を付け、さあいくらでもくらへと云ひ様、火蓋を切つて、盜賊に差付けたれば、盜は驚き恐れ、ほうくの體にて逃げ去りたりといふ、喜作が如き強勇あり、而して又如此女傑あり、蛇喜作に酬る能はず、喜作遂に自ら酬ゆ、勇の過度なるものなり。』

三

これも極く古い話であるが、筑前の博多の或る商家に十四五の美しい娘があつたが、何時とも無く、三尺ばかりの蛇が来て、その娘の傍を離れ無くなつた。その蛇を殺してそれを捨てにやると、その捨てに行つた者が歸つて來ないうちに、又何處からか同じやうな蛇がやつて来て、娘の傍を離れずに居る。

娘が坐つて居る時には、蛇はその前で輪を作つて、娘の方を見て、舌を出して、動かずに居る。娘が立つて行くと、蛇は一尺ばかり後から這つて附いて行く。娘が早く歩けば、蛇も急いで這ひ、娘がゆる／＼と歩けば蛇もゆる／＼と這つて行くのであつた。両親はそれを甚く悲しむのであつたが、何うにもしやうが無かつたし、娘もそれを苦しんで、段々顔が蒼ざめて瘦せて行つ

た。十七八になつても蛇憑きの娘といふので何處へも嫁に行けやうが無かつた。

その時、高僧道元和尚が入唐の途すがら博多で風待ちをして居た。その商家の者たちは、それが尊い僧だと聞いたので、その旅宿へ尋ねて行つて娘に蛇が憑いて居る事を話し、何うか一遍御覽の上、法力を以つて蛇を退ぞける方法もあらば、それを施して頂き度いと、只管頼んだ。

道元は、法力を以つて蛇を退けることができるといふ見込みはないが、何さま珍らしいことであるのだから、一遍見て置き度いと思ふが、唯見せるだけ見せるか、何うだと、商家の者に云つ

いや、それは元より願つてももの事だと云つて、娘をば母がつれて、和尚の宿へ行つた。和尚は二人を自分の座敷へ呼び入れて見ると、成る程聞きしに違はず、蛇がついて來て居る。

道元はそれをつく／＼見て居たが、やがて、『もう長く居られるには及ばない、が、歸る時には、拙僧の前の此の柵を越へて歸りなさい、これには少し理由があるのだが』と云つた。母は『畏まりました』と云つて、先に立つて柵を越すと、娘も續いて越す。すると、蛇もその後から隨いて行く。

で、蛇が柵を越す時に、道元は扇の要かたかでもつて蛇の尾をきゆつと力強く抽へ付けたので、蛇は首を戻して、尾を押へて居る要に喰ひ付かうとするところを、道元は黒衣の下から剃刀を取り出して、蛇の首を斬つてしまつた。母も娘もそれを見て甚く驚いたが、道元は、もう二度 蛇の來る氣遣もはない、安心しろと云つた。

それから後は、道元の云つた通り。蛇は來なくなつた。これは、蛇の執念を別な物に移して、娘に憑く心を轉じさせてしまつたからだといふのであつた。

四

『河波の三好、河波、土佐、淡路三州を切取、讃岐は己に旗下に屬す、其武威五畿に振へり、梶原、菅、舟越、安宅皆共同姓なり、舟越は三好が三男にて、淡路の周本に在城して、年々播磨、紀伊と相戦ふ、播磨より福浦には三里、紀伊より牟島には九里、海上近ければ、漕渡りて淡路の地を侵す、舟越五郎左衛門能く拒ぎて、度々播磨、紀伊の兵を挫く、ある時紀伊より牟島のわき大石が鼻といふ所に兵船をよせて戦ふ、時に舟越強弓ならばわたり四寸八分の大雁股を以て、一陣

陣に進みたる敵の背の吹返のきはより眉を掛けて鏑はなを横に射切て、艦はなは海上に墮、胸は舟中に偃る、それより矢つぎ早に放ちければ、敵弓一張に射立られて、遙に引退く、舟越が勇力にて遂に侵掠られず。』

所が、その頃は、三年續けて大雨洪水があつた後に必ず旱魃があつて、國疲れ民饑るといふ有様で、大いに困つたのであるが、それはしどりの池に住む大蛇のわざだといふのであつた。

舟越は『何千といふ兵をさへ一人で防いだ自分が、僅一匹の蛇の爲めに苦しめられるといふのは、如何にも残念なことである』と、云つて、弓矢を持つてしどりの池へ行つて、池の汀に馬を乗り止めて、『此の池に大蛇が住むと聞いたが、三年の洪水、大旱も皆貴様が所業だといふことだ、さア今形を顯はして出て來い』と呼はつた。舟越が大蛇を退治に出たと聞いて、その將の納氏、加治氏等も後から駆け付けて、池の汀で舟越と一緒になつた。

少時すると、池水の上へ一尺ばかりの小さい蛇が浮び出た。舟越はそれを見ると『そんな姿で此の舟越に見えんとすることは可笑しや、速にまことの姿を顯はせ』と、叱咤した。蛇はその言葉と共に水底に沈んでしまつたと見るうちに、乍ち、急雨一過して、風が烈しく吹いて來て、浪

逆捲いて、非常に大きい蛇が池の上に現はれて、箕を二つ合せたやうな大きい口から、火焰かと思えるやうな舌を吐いて、舟越へと向つて來た。舟越は常に好むところの大雁股の矢をその蛇の口へ射込んだが、蛇は倒さまに引つくり返つたと見えたが、又直ぐ起き直つて、舟越を追つかけた。

舟越は納、加治と共に馬に鞭つて城の方へと引返した。大蛇は尙之を追つ駈ける。草木の上を足る音が疾風の如くであつた。

しどりが池から周本の城まで、一里半程であつたが、その半路のところにあま^いと云ふ所があつて其所に大楠の森があつた。舟越等がその森の陰へ入ると、大蛇は舟越等を見失つて、森の梢に上つて見下ろすところを、舟越は振り返つて、二の矢をば射したが、その矢が大蛇の喉に中つたので、大蛇はそれで弱つて、追ふ事がさう急でなくなつた。

舟越は馬を乗り付さぬ程に、馬の足を加減して城の方へと引いて行くと、大蛇もまたそれに随つて、追つてくる。城へ着くと、門を開かせて馬を乗り入れて、直ぐ城門を閉ぢたのであるが、大蛇は直ぐ續いて城門を上り踰へようとした。其所をば、納は持つて居た眉尖刀で大蛇の首を斬

り落とした。大蛇はその時息を吹つかけたが、それが納の身體に當ると、まるで熱湯をあびせかけられたやうな心持がした。納も加治もさういふ毒氣に觸れて、甚だ煩熱して、その日のうちに死んでしまつた。それから、門番の足輕三人と、舟越、納、加治の乗つて居た馬三頭とは、立ちどころに斃れ死んだ。舟越も三四日過ぎて、全身の皮膚が赤く爛れて、死んでしまつた。

五

上洲館林の士に竹尾隼人といふものがあつたが、小鳥狩が好きであつて、講武の暇ある時は、よく小銃を携さへて、野山を狩り歩いた。

或る日、山の中で鳩を見たので、小銃を執つて、打つたところが、鳩は藪の中へ逃げ込んでしまつた。隼人は續いてそれを追つて行つて、葛蔓のからんで居る中を推し分けて、あちらこちらと鳩をさがして居たのであるが、そのうちに、隼人の腹に蔓がからみ付いたと見えて、段々に引き締められるやうな心持がしだした。

不思議に思つて、よくよく見ると、蔓だと思つたのは可なり大きい蛇であつて、それが隼人の

腹を巻いて居て、もう三匝程巻いたところであつて、その頭は傍の松の太木の枝に打ちかけてあつて、隼人をだん／＼と引寄せようとして居るのであつた。

隼人が振り仰ぐと、大蛇は息を吹つけ掛け吹つけ掛け、唯一呑みにしようとしたのであつた。隼人は腰の刀を探ぐつたが、何時か抜け落ちてしまつて居て、鞘ばかりであつた。何うにもし方がないので、腕を伸ばして、大蛇の喉と思はれるところを松の幹へ押し付けて、それにわんぐり喰ひ付けて喉の鱗を喰ひ破り、三口四口に及ぶといふと、さしも大きい蛇も、急所の疵には弱つたものと見えて、隼人の腹を締める力は餘程緩んで來た。隼人はますます力を極めて蛇の喉を噛んで、遂に喉を喰破つてしまつた。

血が顔に濺ぐのを厭はずに、喉の肉をぶつりぶつりと喰ひ切つて捨て、居るうちに、蛇はいよいよ弱つて樹から落ちてしまひ、隼人も安心すると共に、傍に倒れて氣絶してしまつた。

隼人の家來は、方々へ散々になつて、主人の行衛を探して居たのであつたが、到頭隼人の倒れて居るところを尋ね當て、その體を見て大いに驚き、隼人を扶けて歸つて、さまざまに介抱した。隼人は五六日経つと、すつかり心持が好くなつて、元氣ますます盛であつたと傳へられて居る。

六

元文元年の春のことであつたが、安藝國佐東郡八木村の内阿生山の中迫といふ處に大蛇が現はれて、往來の人を悩ました。

「その形狀を聞くに、太さは巨線をも呑つべく、長さは八峽八谷の間に蔓延るべし、松柏背上に生て、眼光日月を並懸たり、舌を掉ば紅焰を翻し、身を躍せば白花を播す」といふ程のものであつた。

八木の城主、香川左衛門尉光景は、その由を聞いて「我が領内ではあるし、殊に城の近邊にさういふ者が出て、人民を悩ますといふのは、甚だ怪しからん、急ぎ退治しなければならん」と云つて家子郎黨を召し集めて、評議を開いた。

所で、光景の一門に香川左衛門太夫勝雄といふ若者があつた。その時年は十八歳で、身の長六尺八分、骨太く眼逆しまに裂け、隆準く口廣く、頬髭荒々と生ひ、腕に力贅累々と湧き、十五人が力を蓄へて居たのであるが、伊勢參宮をした歸りがけに、大蛇の現はれる話を聞いて、衆々、

人間を斬るだけなら別に珍らしくはないのだから、鬼神とか天狗とかいふやうなものを斬つて名を揚げ度いものだと思ふのだが、何か不思議な事でも現はれて呉れ、ば宜いかなアと、胸を摩つて居たのであつたから、これこそ願ふところの事だといふので、光景に向つて「此の事は何卒勝雄一人に任せて戴き度い。彼の大蛇如何に天地に屈伸して働かうとも、萬物の靈たる人力には争でか勝ることができようぞ。昔時、素盞鳴尊は筱川上の大蛇を斬つて十握の寶劍を獲給ひ、漢の高祖は道を遮ぎる白蛇を斬つて、三尺の劍を揮つた。その時代とは百千の歳を隔て、も居り、又遠く海河を隔てた物語ではあるが、自分の勇烈の機は更に劣つては居ないと思ふ。それで、是非某が馳せ向つて悪蛇の身首を立ちどころに二つにしてしまひませう」と、云つた。

光景は、勝雄の勇氣を大いに感稱して、家に傳はる義元の太刀の三尺一寸あるのを取り出して勝雄に與へた。勝雄は非常に喜んで、太刀を戴いて腰に帶び「武功の歴々多き中に若輩の某へ此の討手を許されたのは、身にとつて莫大の名譽であり末世の手柄と存する。但大蛇を退治せずば、今生では二度人々と面を合しはしない」と高言を吐いて光景の前を下つた。

勝雄は、小櫻緘の鎧を隙間も無く着なし、同じ毛の五枚兜の緒を締め、義元の太刀に、三尺三

寸あつた左文字の太刀を帯そへ、人多くてはいかんであらうと思つたので、唯一人黒き馬に黒鞍置いて打ち乗つて、二月下旬の曉に、月の光を兜の星に輝かし、尙牙返へる山風は小篠の霜を吹き拂ふ阿生山さして上つて行つた。

所が大蛇は、化して龍になるといふ位の異靈のものであるが爲めか、勝雄が退治に向つたことを自然と覺つたものと見えて、何處にも姿が見えなかつたので、勝雄は次第に山奥へと分け入つて行くと、朧月の残つて居た大空は俄にかき曇つて、時ならぬ村雨一頻り降り來り、巖裂け岸崩れ、山鳴り谷應へて、満山暗々然として、物のあやめも見え分かず、如何にも凄まじい氣色となつた。

勝雄の馬はその氣色におちたのであらうが、進み兼ねて身振ひして立つて居た。勝雄は少しも心を撓まさず、馬をば其處に乗り捨て、置いて、歩立で、巖を傳ひ、葛を攀ぢて上つて行つたが、東方の空が大分白みかけた時分になつて、山上を遙に見上るといふと、高さ十丈許の岩蔭の樞の大木の一の枝に、大蛇は頸を持たせて眠つて居る態で、呷鳴て居たのであるが、息が甚く荒いでその五六間周圍の草木は嵐に靡くが如く動いて居た。勝雄はこれを見て、如何に鱗虫なればと

て一言をまかけず斬つてしまふのは、寢首を搔くに等しく、卑怯なことだと思つたので、程近いところまで立ち寄つて高聲に斯う呼はつた。

「毒蛇確に聞け、深山大澤は龍蛇の蟄するところと聞けば、元來汝の輩の本所たり、村屋近境は百姓の聚落たり汝等の徘徊すべき地にあらず、然るに、汝本所を捐て村里に出、人民を凶害することいはれなし、汝速に本所に歸り、再び來ることなくば、早く其處を去るべし、もし立去らざれば勝雄唯一太刀に汝を殺さん。」

大蛇は眠つて居た眼をかつと啓き、紅の舌を閃めかし、火焰の如き息を吐きかけ、枯木に似たる角振り立て、唯一呑と飛びかゝつた。勝雄は太刀を抜きかざし、飛び違ふやうにして丁と斬つたが、誤たずに、大蛇の頸をはつしと斬つた。首は空中に舞ひ上り、雲路遙かに躍つて居たが、やがて黒雲一屯火焰を包んで降ると見えて、彼首勝雄が上へと眞倒に落ちかゝて來た。勝雄は抜きも上げたる太刀ではたと斬つた。斬られて其首は七八町飛去つて、田の上へ落ちたが、上下動すること夥しくして、餘勢なほ休まず、また一町許り躍り越えて行つて、地を穿ち岩を覆し、流るゝ血川をなし、終に其所が淵となつた。今蛇王子淵じやうしじがふちといふのがそれだといふのである。

勝雄は大蛇の毒氣に中られたと見えて、暫く兩眼をわづらたのだが、醫療の効があつて程なく全癒した。勝雄は永祿十二年作州高田の合戦で、年五十五で討死した。

魔術

一

切支丹宗門の者は、魔術を行つたと云ひ傳へられて居る。渡來の教師たちは大抵醫術を以て、布教の方便に供したらしいのだから、さういふ醫術を心得て居た教師たちのうちには、今日の所謂催眠術のやうなものを、實地に行ひ、人を信服せしめたものもあらうかと思はれる。で、さういふ點が語り傳へられて何時しか、魔法の傳説になつたのだあらうと想像せられるのである。

「参考天草軍記」を見ると、左の如き記述がある。

「夷町中の濱と申す所に市橋庄助と申す外科醫師、亦湊町に島田清安と申す醫師、此兩人は萬般

放下を仕つり候、是のみ唯今評判なりと申し上げれば、秀吉公聞し召、夫は珍らし、何卒見度きものと命あれば、即ち佐々木平右衛門に申し付けて、堺へ使を遣はし、彼の兩人を呼び寄せらる。その翌日右兩人召し出さる、に、御門の側らには、奉行役人を始、御近習後宮の女房達に至る迄列座たり、秀吉公命に、其方ども不思議の術を覚えし由聞及ぶ、依て何ぞ珍らしき業を致し見せよと命あれば、兩人謹んで畏まり奉つり候と、夫より大鉢に水を入れさせて、紙を菱形に切りて、其鉢に入れければ、紙は忽ち鯉、鮒其他種々の魚と變じて水中を泳ぐこと、眞の魚に異ならず、暫時有て原の紙となる故、見物の衆人奇異の事なりと思ひ居たり。又何ぞ致せと上意有れば、此度は紙縷を一筋取り出し、何れも様駭き給ふなど、何やら口に呪文を唱へ、疊の上へ投げ出せば、大いなる蛇と成りて這繞るにぞ、見物ありし女中ども大いに驚き逃出す故、早く仕舞へと命あり、手を叩けば、原の紙縷となる。又御臺所より鶏卵を取り寄せ、掌中に載せ、口に呪文を唱へて疊の上に置きければ、忽然雛鳥と變り、見る間に、大いなる鶏となり、羽た、きをなし、發を作り、暫時して原の鶏卵となる。此の上は何なりともお好み遊ばされ候へと申し上げれば、秀吉公興に入り給ひ、婦人ども何にても望むべしと命せければ、富士の山を此の所へ移し見すべ

しとあれば、兩人申しけるには、大いなる物は御座敷には叶ひ難し、御庭へ造り申すへしと、障子の外へ出て、呪文を唱へければ、御庭の氣色變りて、富士山現れたり、何れも見て、晝きしよりも見事なりと感じけり、又障子を鎖て呪文を唱へければ舊の庭となる。

又近江八景を顯し、叡山、三井寺、膳所の城、堅田、比良、唐崎など悉皆く現したり。

其他須磨、明石の景色など萬般奇妙のことども爲して御覽に入れければ、君を始め何れも珍らしき事と駭き感じられ、秀吉公命に、世に幽霊といふもの有りと聞けど、見たることなし、是も成るべき哉との御尋ねに、兩人畏まり候、さりながら幽霊は晝出たる事なし、夜の物なれば、日の中は其業行ひ難し、夜に入りて、御覽に入れ奉つらんと申し上げれば、然らば休息せよと、御料理御酒を賜はり、程無く日も暮ければ、燭を夥だしく灯し、白晝の如くなる故、兩人申しけるは、斯様に灯火御座候ふては行ひ難し、悉皆く御消し下さるべしとて、皆消させけり。

時に十八夜の月明らかにさし昇りしに、兩人は障子の外へ出、暫くありて、障子を開けば、今まで光り輝きし月も曇り、風戦吹きて何やらん物凄く、御庭の茂みより、白き物を被て色蒼然たる幽霊顯れ、顔を掩ひ、泣々出たる形は身の毛立つ程氣味悪く覺えたり。女中方大いに懼れ、

是は又用無き御望み哉と身を締め奥へ逃げ行くもあり、幽霊は次第に近接き、御縁の先まで寄りければ薄月ながら有りくと見ゆる故、秀吉公是を篤と御覧ありて、疾仕舞への命に、兩人は隙子を閉て呪文を唱ふれば、忽地消失て、空も霽れ元の月夜となりけり……

斯くて、兩人は、御望み通り御覧に入れしにより、定めて御褒美も下され、永く御出入りともなり、又諸候にも近接豫ての宗旨を弘めんと思ひ居たりしに、秀吉公近臣に命じ、兩人の者を召捕り随分厳しく禁獄せよと命ければ、近臣ども心得ずとは想へども、上意なれば其旨武士に下知なし、彼の兩人思ひがけ無く居る處を高手小手に厳しく縛め入牢致させ置きぬ。然れば、兩人は妖術を施す隙もなく阿容々々と擒となりたり。

秀吉公の命に、彼の兩人は全く放下に非ず、切支丹の殘黨ならん。吾最初より餘り不思議なる事を致す故、慙と幽霊を望みし處、先年攝州にて我未だ微賤の時に寵愛せし菊といふ女、暇を乞ふ故に縁を断ちしに、其の後吾播州を領し筑前守と成りし時、尋ね來り舊の如く仕へん事を望むと雖、一旦暇を遣せし女を召使ふ可きやう無しとて取り上げざるに、露命繋ぎ難き由達て歎く故、不便に思ひ、別所小三郎が娘白瀧姫に附置きたり、然るに白瀧姫を我愛する事を妬み毒害をなし、

大勢を憐ましたるにより、刑罪に行ひ、婦人ながらも、重罪人につき、獄門に梟けて普く諸人に見せたり。我藤吉郎たりし時愛したる女といふ事を汝等も知るまじきに、其の菊女を幽霊に出す事邪術を以て搜り知り、不思議を見せ、我に取り入らんと斯く計ひしに相違なし、拷問に掛て同類を白狀致させよと命けり……

然る程に、兩人を嚴しく拷問に掛ると雖も、一向同類は白狀せず、然れども、終に吟味の末、切支丹の法に相違なしと白狀に依つて、天正十六年九月二十九日、栗田口に於て、磔刑に處せられ、尙國々御穿鑿あり、切支丹の者數多御所刑にぞなりたりける」

此の話の後半が餘程面白いと思ふ。市橋、島田の兩人は、此處に云つてあるやうな奇術を行つたのではなかつたが、上手な放下はやる男であつて、秀吉の註文で、兩人が全くの放下で、女の幽霊を見せたところが、その顔が偶々秀吉の平常氣にして居る菊女の顔に似て居たとか、若しくは、單にさう似て居るやうに秀吉に見えたとかで、兩人が切支丹だと極られてしまつて、所刑されたといふことなのであるとすると、さまざま面白味が、此の話には加はつて來ると思ふのである。

二

まだその外に、千壽院萬海といふのが奇術を行つた話もある。

「此の程殊の外旱魃にて一滴も雨降らず、人民歎き憂ひ、萬般雨乞しける時に、千壽院は此の時不思議を見し、耶蘇宗に人々を引き入れんと、先づ近在に赴き、八脊小原の邊の民家に立ち寄り……拙者は大佛前に住居致す千壽院萬海法印なり……拙者の奇術にて忽然に雨を降せ五穀豊熟ならしめんと存するなり、とばかりにては分り難からん、御望みならば不可測を顯はし見せんと……口に呪文を唱へ、側に起りありし炭火を三つ四つとりて掌中に載せ、各々見給へ、火は水を以て制し、水は火を以て制す、月は水、日は火なり、陰の姿を以て起りし火を手取りにする是雨乞の驗しなりと申しければ、在り合ふ人々大いに驚き、是は不思議と云ひ囃すに、追々聞き傳へ聚ひ來り、衆人奇異のことに思ひ居たり。

庄屋年寄ども何れも相談して、雨乞を頼みけるゆえ、千壽院承知して、八脊の中にて場所を撰み、二丈四方に構へ、角々に竹を建て、注連を張り三尺許りに白砂を盛り、堅炭十俵を起して用意なすに珍らしき雨乞なりと……大勢集り見物す。千壽院は白無垢に褌を掛け、御幣を手に持ち、起り立たる火焰の前に立て……斯く起り立たる火の上に立ち、天を祈り、陽を鎮め、立ちどころに雨を降し見すべしと、珠數押揉て何やら唱へ、火焰織んの上に、飛び上り、彼方此方と駆け廻れり……此の雨乞の風聞二三日前より落中へ聞えければ、所司代板倉伊賀守殿怪み給ひ……役人ども罷り越し様子を見と、愈々火の上を歩るくならば引き立て來るべしと仰せあれば、捕手の役人ども……萬海笑を含み火の上より下るところを、動くなと捕て押へ縛めければ、思ひ懸け無きこと故、見物の諸人四方へ逃げ散つたり」

「板倉殿工夫あつて、先年切支丹宗停止布達されし節關係の役人年寄又は隠居等を召して見せければ、其中に見知りし人ありて、彼は南蠻寺のヒヤンと申せし者なりと云へば、然もあるべしとて入牢仰せ付けられ……定めて徒黨あるべしと……種々拷問に及ぶ中、幻術を以て苦を除け、機好くば逃げ去らんとなしけれども、流石殿しき細目なればその事かなはず、併如何程拷門なすと雖も白狀せぬ故、餘類詮議は追つての事と定め、先づ千壽院を刑罪に行はんと、粟田口に於て磔に處せらるゝに決し、町中を引廻し、所刑場に到れば、矢來の内外警固嚴重なる中に、千

壽院は弱りし體にて、物をも言はず打ち萎れて居る故、此の期に及びては幻術も出ざるべしと、衆人思ひ、馬より下し、礮架に寄せて縛り付けんとせし處に、急に鼠と變じて驅廻りければ、役人驚き周章、唯撃ち殺せと立駭ける處に、空より鳶舞下りて、彼鼠を掴み、雲井遙に飛去りけり。皆人呆れ果、爲すべきやうも無く……」

樹下漫筆

一

古來、名高い傑い人々は皆幸運であつて、それ／＼不思議に危難を免がれて、その優越な地位に達することができたとの傳説がある。

人の心は西洋も東洋もさう違つて居無いのであるから、傳説などになると、東西その揆を一にするものが少く無い。

米國の獨立戰爭より以前の或る戰の時に、或る士官が兵を率ゐて、森の中に埋伏して居ると敵の若い士官がその間近まで來て、悠々と偵察をやつて居るので、それを射撃すれば丸が中ることは必定だとは思つたもの、その若い士官の斥候振りが、如何にも落着き拂つて居るのに感服して、それ程の勇士をむざ／＼狙撃するに忍び無くなつて、その儘見遁してしまつたのであるが、その大膽な若い士官は、後に米軍の元帥となり、大統領となつたジョージ・ウオシントンその人であつたことが後になつて分つた。

そんな話を何かで讀んだことを記憶して居るのだが、『續武將感狀記』を見ると、豊臣秀吉に就て左の如き話がある。

山縣三郎兵衛尉昌景は飯富兵部少輔虎昌の弟であつて、初めは飯富源四郎と云つたのであるが、武功度々であつたので、信玄がこれを賞して、山縣と改めさせた。山縣といふのは武田家の舊き由緒のある姓氏であつたからである。

長篠の戰の時は、昌景はもう年が六十位であつた。甲斐勢の先鋒であつて、敵と間近に相對して居たので、敵が仕寄りを付けるのを見て居ると、一人の武者が眞先に進んで、柵の杭は斯う打

つものだとか、繩の結やうは斯うし無ければいけぬなど、一々指圖をし、自分で繩を男結にしまたりして居る。昌景はそれを見て、彼の武者は尋常の雑兵で無い、彼を撃てと、部下に下知して、馬上に突つ立ちたるところを、参河の陣から打つた鐵砲の弾が中つた。けれども、昌景は馬から落すに、采配を口に銜へ、兩手で鞍の前輪を押へて、死んだ。實に大剛の勇士だと云つて、後々までも傳へられたのであるが、柵の繩を男結にして居た武者は羽柴筑前守であつたと後に知れたといふのである。

二

妖怪だと思つて居たところが、その正體が知れると、何でも無いものであつたといふやうな話によく聞くのであるが、『武將感狀記』の中に次のやうな話がある。

中川修理太夫秀重の家隸赤座七郎兵衛は鐵砲頭であつたが、赤座の妻の弟村井津右衛門といふのが浪人で、赤座の所に居た。岡の城は地理嶮岨であつたので、諸士の居宅は此所、彼所に散在して居て、家のあるところから十町ばかり離れたところに墓原があつた。何時の頃よりか、雨風

の夜にはその墓原で何物が羽ばたきをしてへんな聲で鳴くものがあるので、妖怪だといふ評判が立つて、農、商、女、子どもなどは大に恐れて居た。

さういふ評判が立ちだしてから五七日経つた頃、村井津右衛門は知人の家へ行つて、歸りが夜になつた。折しも、夜は更けたし、雨風は烈しくなつたので、歸り路は丁度その墓原を通るのだから、此頃は妖物が出るなど、いふ噂もあるし、今夜は是非泊れと座中の人々は、村井を引き留めた。

村井は、心の中では、人々の言葉は何うも粗忽である、妖物が出るから泊つて行けなど、云はれては、泊り度くても泊れぬでは無いかと思つたものゝ、さらぬ體で、今夜は必らず歸ると、赤座に云つて置いたから、寢ずに待つて居るだらうからと云つて、強て歸途に就いた。

墓場の近くまで來るといふと、成程羽叩きと鳴き聲とが聞える。此は實際だと思つて、近寄つて行くうちに、風の絶間になると、その聲がハタと止んでしまふ。大凡此の邊であらうと思ふところへ寄つて行くと、風が吹いて來ると共に、ハタ／＼、ヒヤウ／＼と云つて、何物か頭のて上へかゝつて來る。兼ねて斬らずに捕へようといふ心組みであつたから、直ぐそれを捉へて手探

にして見ると、竹の子笠が墓原の竹垣へ掛けて置いてあるのであつた。それを取り外すといふと、風が吹いて來ても何の音もし無くなつた。

村井はその竹の子笠を持つて、歸つて、赤座の寢て居るのを起して、自分は今夜妖物を斬り留めたと云つた。赤座はそれは不思議千萬な事である、一體何うしたのだと尋ねた。村井は他の人を退座させて、赤座だけに實は斯ういふ次第なんだと、實際を話した。赤座は、イヤ、それならば、實際の事は決して人に話さずに、唯妖物を斬り留たことにして置けと云つた。村井は明る日人に逢ふことに、妖物を斬り留めたと話した。

ハタ／＼とは笠が垣根に當る音であり、ヒヤウ／＼とは竹の穴に風の笠に支られて激する音であつたのである。

それから後は、その墓原では何の音も無くなつたのであるから、人々は皆村井が妖物を斬り留めたのだと信じた。

此の話の面白味は、赤座が、實際を人に告げさせずに、妖物を斬つたことにさせてしまつたところにある。此の話はもう少し肉を付けると、一寸氣の利いた小説になる。

藤椅子に倚りて

一

夏目漱石君の亡くなつた時と、有島武郎君の父君の武氏の逝去せられた時に、兩家とも不思議な詐欺僧の手に乗つた話は當時可なり廣く傳はつたと思ふけれども、文壇關係の事に餘り注意を拂つて居られない人々にはまださう知られて居無いことであらうと思ふので、傳聞のまゝを書いてみる。

夏目君の亡くなつた時分——多分葬式が済んでからでは無いかと思ふのだが——、一人の若い僧がやつて來て、自分は故人の爲めに救はれた人間であつて、殆ど死ぬべき運命を脱却するを得て、越前の永平寺へ行つて、修業して居たのであるが、その恩人の夏目氏の訃を聞いたので、直ちに走せつけようとしたのだけれども、旅費が無かつたので、越前から徒歩してやつて來た。願

くば、靈前での回向を許され度いと如何にも殊勝な口振りであつたので、夏目家では、甚く感動して、佛間へ招じ入れて讀經をなさしめ、餘分に金を包んで與へた。

さういふ際の夏目家の人々の所置は尤至極であつて、何んな家でも不幸の際には、人々の心持が感傷的になるものだから、さういふ場合、故人の陰徳が顯はれたと思ふべき理由があれば、非常に感動するのが自然であらうと思はれる。従つて、恩を忘れずに數百里の道を遠しとせずして弔問に來たといふ人に對しては、懐しみも親しみも同情も強くなるのが當然である。

所が、それから間も無く、有島武翁が逝去された時分に、矢張り一人の若い僧が來て、夏目氏の家で云つたと同様なことを云つた——即ち故人武氏に九死一生の場合に金を恵まれるか何かして、永平寺へ行つて居たが、武氏の計を聞いて、徒歩で上京したと云つたので、有島家でもその僧の特色を喜んで、故人の靈前で回向をさせ、相當の布施を包んで、僧に與へた。

それから間も無く、森田草平君が有島家での話を傳聞して、武郎君に注意を與へたのであつたか、或は有島家の方で、夏目家の不幸の場合に有つたことを傳へ聞いた爲めであつたのか、どちらであつたか聞き漏らしたが、とにかく、武郎君と草平君との間に交渉が始まつて、その結果、

その如何にも殊勝らしかつた僧は全く兩家を騙つたものであることが明にされた。

ところが、兩家の方にさういふ事が明になつたことを知らなかつたものと見えて、その僧は、その後、夏目家を訪ひ有島家をも訪うた。夏目家の方では、僧が漱石氏の墓參すると云つたので、久米正雄氏が雜司ヶ谷へ同行しながら、途中で僧を可なりとつちめたといふことである。有島家の方では、僧が來ると、人々が取りまいて、さんぐに面の皮をひんむいたといふのである。

生馬君は、その僧の事件に就いて私にかう語つた。

「私の父は、人を助けたことなどは、大抵家の者に話す質であつたので、それから考へれば、父が家の者に話さぬやうな所謂陰徳は先づ無いのであつて、僧の話は始めから少し疑はしい位には少くとも思つてい、筈であつたのだが、何にしろ、皆の心が故人のことでひどく柔になつて居る時であつたので、僧の話に直ぐ飛びついてしまつて、此れこそ本當の陰徳だといふ風に、誰も残らず感動してしまつたのだ。ところで、後になつて、皆が僧を太く責めた時の僧の態度なんだが、それが餘程、通例の人の豫期に反するものであつた。僧は人々からさんぐと

つちめられても、恐縮してひたあやまりにあやまるといふのでもなければ、引かれ者の小唄的に何か反抗の言葉を出すといふのでもなく、何と云はれても唯下を向いて黙まつて居るのみであつた。」

何うも、その僧は可なり度胸の据つて居る人間であつて、さういふ詐欺を行つたのも、夏目、有島兩家に於て、あつたのみでは無からうと思はれるのだが、吾々はその前後に於ては何も聞くところが無い。

二

以上の話を聞いて居る私は、先頃短篇の探偵小説で「フェウネラル・フランク」といふのを讀んで、同じやうに、不幸のあつた家へ行つて、詐欺をする人間の話に一層注意を引かれたのであつた。フランクといふ名の男で、葬式のある家へ行つて詐欺をするので、それで、葬式(即ちフェウネラル)のフランクといふ綽名を得た悪漢の話であるのだが、その男は非常に善く馴らした小さい犬を使つて、詐欺をやるのであつた。

例へば、或る可なり名高い紳士が死んだことを知るといふと、フランクは他の町から来た極く人の好い、上品な紳士らしい様子をして、小さい犬を抱いて、その家へたづねて行つて亡くなつた主人の名を云つて面會し度いといふ。取り次ぎの者が、主人は死んだといふと、非常に驚いた風をして、それでは自分は死んだ主人の舊友だから後つぎの人に逢ひ度いといふ。後つぎの娘などに逢うことができるといふと、フランクは自分は近頃は亡くなつた主人とは少し遠々しくはして居るもの、昔は非常に心安くしたものである、自分はこれ／＼の町に住んで居るこれ／＼の者だが、愛犬が怪我をしたのでその療治を受ける爲めに此の町へ来る途中、犬を犬箱へ入れるのも可哀さうだと思つて、革靴のなかへ隠してつれて來たので、犬のことが氣になつて、ついでに懐中物の用心などはそつちのけになつて居た爲めに、すつかり懐中物を拘摸にしてやられてしまつた、此の町には親しい知人といふのも餘り無いので、全く當惑してしまつたのだが、その時思ひ出したのは當家の主人のことである、此頃こそ少し疎遠にはして居るもの、古くからの友人であるのだから、犬の治療費と家までの汽車賃とを借り度いと云つたら、一も二も無く貸してくれるだらうと當にしきつて、尋ねて來たところが、豈はからんや、主人は亡くなられたと聞いて

て、實に残念に堪へ無いとともに、自分も何とも當惑してしまつた、と云ふやうなことを、如何にも世間にうとい人らしい、鷹揚な言葉つきで話す、主人側の人が女で、もあるといふと、フランクの言葉を直ぐ信じてしまつて、一體何れ位あれば宜しいのかと聞く、すると、フランクは貴女に拜借するのは何うも相済まんといふ空遠慮をしたあとで、先づ五十圓もあれば、何も彼も辨するのだがといふ、結局それだけの金を渡されるといふと、犬に向つて『此のお嬢さんのお蔭で、お前の怪我した足が直せるのだから、よく御禮を申し上げな。』といふやうなことをいふ。犬は前足を一本出して、家の主人の袖へかけようとしかけはするのだが、急に怪我して居る部分に痛みを感じるのだと見えて、けたましくキャン／＼と鳴き出すのである。

主人側の人は、犬のさういふいぢらしいさまを見て、いと哀れに思つて、フランクを送り出すのである。

フランクはさういふ詐欺をやる男であるのだから、自分が騙る先きの家の事は十分知り抜いて居なければならぬので、町の重なる紳士のことを調べる材料と云へば、新聞雑誌の切り抜きであれ、紳士録であれ、會社録であれ、ことごとく備へて居て、彼の家は正に小興信所の觀をなす位

總ての材料が揃つて居た。彼はさういふ材料によつて、先きの家の人と話をする時に、言葉の上では少しもボロを出さずに居られるのであつた。

それから、その犬が前に云つた通り、十分馴らした伶俐な犬であつて、勿論實際は怪我も何もして居ないのであつたが、前足を一寸さし出して置いて、直ぐさも痛さうにキャンキャン鳴くやうに、ふだんから教へ込まれて居るのであつた。

斯ういふ詐欺は、如何にも巧みな方法ではあり、收穫も容易であるのであつたが、フランクは悪黨仲間からは、太く擯斥せられて居た。他人の不幸の場合、人々の悲しみに心亂れて居る際に乘じて、金圓を詐取するといふのだから、その仕事の容易なる點に於いて、謂はゞ、卑怯なる方法、賤劣なる犯罪だといふのである。詰まりさういふ點が、悪黨仲間の面目——といふのも可笑しいが——を汚すものと見なされて居たのである。

所で、フランクの詐欺が度々被害者たちからの訴へ出によつて警察の注目するところとなりだして、その町で稼ぐことは全く危険になつて來たので、しばらく窺伏を決心して居るうちに、尙運の悪いことには、大事な犬が病氣になつて日に日に衰へだした。犬はフランクに取つて大事

な商賣道具であつたのみならず、彼はその犬を長年飼つて居たので、その犬を甚く愛して居た。それで、何うしても犬を醫師に見せなければならなくなつて來たけれども、フランクの人相風體も犬の毛色なども大凡そは警察側へは知れて居るのであらうから、犬だけならば兎も角、フランク自身が犬をつれて醫者のところへ行くのは、危険此上ないことであつた。

其處で、フランクは、惡黨仲間の見知り越しの連中に、犬をつれて醫者のところへ行つてくれまいかと頼んで廻つたのだが、誰も彼もあざ笑つて相手にしてくれない。己むを得ずフランクは自分の危険を忍んで、犬をバスケットへ入れて、醫者のところへ向ふ。途中で自動車をよけるとたんにころんで、バスケットを投げ出してしまつたのだが、人々に扶け起されると同時に、直ぐバスケットを探したけれども、影さへ見えなかつた。

何うにもし方がないので、フランクは家へ歸つて、さんくく歎いた末に、彼が最後に金を騙り取つた先きの當の娘が動物虐待防止會の幹事か何かであつたことを思ひだして、自分の愛犬もどうかして幸にその會の手で拾ひ上げられることもあるかも知れぬと思つて、自分がそれまでに稼き溜めて居た金を全部その會へ寄附することに決心して、それに必要な手紙を書き始めるのであ

る。

三

もう何うしても二十何年前に死んだ人であらうと思ふのだが、中島基といふ人があつた。明治二十七、八年頃には、もう五十位であつたらうと思ふのだが、古い佛蘭西語學者で、若い時分に共に學んだ連中は皆學界だの政界だの、重立つた人々になつてしまつて居たのだが、中島氏だけは家庭の不幸か何かの爲めに途中で失脚してからといふものは、酒にばかりひたつて居て、次第に落魄して、とゞの詰まりは、知り合ひの學者、若くは知名の人々のもとを廻る乞食のやうなものになつてしまつた。

門に立つて、病氣で難澁をするから、少し惠んで呉れといふやうな近頃の乞食とは違つて、玄關先きで、取次ぎの書生など、悠々と話をしながら、二十錢なり三十錢なり貰へるまで立去らぬといふ風であつたらしい。

小柄な丸顔の人で、鐵縁眼鏡をかけて居て、古る新聞の可なり大きな束を抱へて、下を向いて、

何となく陰鬱な顔で、歩いて居るのであつた。

上田敏君はその時分、西片町の田口卯吉氏の家に居たのであるが、中島は田口氏の家へ無心に來て、よく入口の離れ家に居た上田君を捉まへて、例へば、『君は大學で何をやつて居るのだ。ゾロアか。』など、聞き、『キャリツチの金がほしいのだが、いくらか呉れぬか。』など、外國語をばさんで話しかけるのであつたといふのだ。

さういふ風にして、少しづつ、貰らう金は、片つばしから居酒屋などで浪費されてしまふのであつたらう。

その中島基が或る日例の通り、或る學者の家へ合力を請ひに出かけて行くと、家が非常に取り込んで居るらしかつた。主人に逢ひ度いと云ふと、主人は昨夜死んで、今葬儀の支度中だといふのであつた。中島はそれを聞くと、改めて丁寧に弔辭を述べてから、

『私も世であるならば、香奠の五圓なり拾圓なりさし出すべきものであるのだが、何分御覽の通りの體であるのだから。』と、云ひ、それから急に早口になつて、

『御取込みのなかで、何ともお氣の毒だが、何うか二十錢戴きたい。』

四

故成島柳北氏は幕政時代では何の守といふ所謂る布衣以上の殿様株であつたのであらうから、薩長政府には反對の一敵國の觀があつた朝野新聞の幹部に居て諷世嘲俗の文字を公にしたのであるが、大都の上流に生れた人だけに鬨えを酒に慰め、鬱を狹科に散ずるといふ風で、所謂る當時の大通であつたらしく考へられる。

此の柳北先生に就て面白い逸話が傳はつて居る。

柳北先生が公にした花月新誌は漢文で書いた狹斜情史ともいふべきものであつたのだが、友人の裁判官の某氏がそれを讀むといふと、早速手紙を書いて、成島氏ともあるべき人がさういふ卑俗な社會のことに興味を持つて、それに沈溺して居ることを世上へ廣告するやうな著書を世に出すことは、成島氏の如き國士の爲めに實に惜しむべきことであると、いふやうなひどく鹿爪らしいことを云つてやつた。

花柳通であつた成島氏は、その裁判官が表面は非常に謹嚴な人のやうに見せかけては居るもの

の、實は見せかけ程堅い人ではなく、人眼を忍んでは柳橋で晝遊びをすることも、その劇染の船宿が何處であるかといふことまでもちやんと知つて居たので、裁判官からのその手紙を見るとその餘りに白々しいのに吹きださざるを得なかつた。さんぐ笑つたあとでつい悪戯をして先方を困らしてやり度い氣になつてしまつた。

其所で裁判官某氏の行きつけの船宿のかみさんを説きつけて、某氏が遊びに來たら成島氏に急報することに話をきめたのであるが、それから二三日して某氏が見えたといふ急報が成島氏に達するや否や、成島氏は書生を二三人連れて、その船宿へ乗り込んで、その裁判官が藝者と共に籠つて居る室の直ぐ次の部屋へ陣取つて、廊下に向いて居る障子をばすつかり開け放して置き、家から借りた古机を室の真中に置きその上へ本を載せて大まじめな顔をして、經書の講義を始めた。

「拙者は先き頃、花月新誌を公にして、狹斜の事情を世に知らせたのであるか、友人の判官某氏は、拙者の爲めに手酷しい忠告の手紙を送られた。拙者も成る程とばかり頭を抱へて、全く閉口し、翻然志を改めて、鍛冶屋の手間取りの如くテンカコツカ、テンカコツカと、ひたすら堅いことを心がけるやうになり、此所に諸生を集めて、經書の講座を開き、聖人の道を講ずること

とになつた。」

と云つて、成島氏は咳一咳し、一きは聲を高くして、

「そもく聖人の道は家を整へ、身ををさむるといふにある。但し身ををさむると云つた所で、隣の聖人の如くまつ晝間蒲團のなかへ身ををさめるといふのではない。」

先づさういふのを序開きにして、成島氏は經書の文句によつて、隣室の某氏にさんぐ當てつた。

隣室の某氏は、不意に隣りへ成島氏に陣取られてしまつて少なからず狼狽したのであるが、運の悪いことに、某氏の部屋は廊下の一番奥になつて居て、その部屋を去るには何うしても成島氏の居る部室の前を通らなければならぬ。ところで、その部室の障子は透らす開け放されて居るのだから、何うしても姿を見せぬわけには行かぬ。某氏に取つてそれがひどく辛い事であつたので音をひそめて自分の部室に忍んで居るといふと、隣りで途方も無い講義が始まつて、番毎に隣りの聖人、隣りの聖人とどなられるので、それこそ全く頭を抱へて閉口してしまつたが、それもさう長い事では無からうと思つて辛抱して居たもの、成島氏の講義は何時までも終らないで、隣り

の聖人、隣りの聖人といふ言葉が雷の如く響いて来る。それで先づ弱りきつてしまったのは、相手の藝者で、泣き聲で何うにか結末のつくやうに、成島氏に交渉して呉れと頻りに某氏に頼んだ。某氏もさうなつてはいよいよ兎をぬぐより外仕方が無くなつて、間の襖を細目に開けて、「柳北先生、柳北先生、もう全く降参しました。何うか勘辯してください。」と、両手を突いてあやまり入つた。

五

古い文人の文章を書く事の達者であつた事はよく聞く事であるが、故假名垣魯文氏に關する話も甚だ面白いと思ふ。

假名垣氏は、晩年には文章を書きかけながら居眠りをした。筆を持つた儘で、紙の上へ手を突いて、心持好きさうにコクリコクリやつて居るのであるが、ハツと氣がついた風で眼を覺すや否や、それまで書きかけてあつた部分を見もせず直ぐその續きのところへ筆を落して、すらくと書き了はつたのを見ると、その前を見もせずに書いた部分が前とちやんと連絡して居て、少しも可

笑しなところなどは無い。これは假名垣氏の一藝當ともいふべきまでに、人々に感服されて居た。ところが、魯文氏の教へを受けた野崎左文、齋藤緑雨の兩氏は度々魯文氏の居眠り中にいたづらをした。

それは、魯文氏が筆を止めた後の一二行のところへ眞黒に墨を塗つて置くのであつた。さうして置いて、魯文氏を揺り起すといふと、例の通りに大急ぎで、筆に墨を含ませるや否や、鮮かにすらくと書き續けて、やがて書き了はつて読み返しもせず、組みの方へ廻はすのであつたが、後で組み方から、「先生此所は」と云つて、その墨塗りの部分を質されるといふと、魯文氏は不思議さうにその部分をためつすがめつ見たあとで、「これは私にも分らない。齋藤さん読んでみてください。」といふのであつた。

或る時は又、魯文氏が心持好く眠つて居る最中を見すまして、魯文氏の手にある筆をそつと抜き取つて、毛をすつかり抜いてしまつて、元の通り魯文氏の手へ握らせて置くと、ハツと眼を覺ますや否や、軸だけの筆で原稿の上へがりくと書きつけた。唯墨がほたく落ちたのみで字も何も書け無いので、魯文氏は如何にも不思議さうに筆を見て、毛の無いのに氣がついたと見えて、

小刀を軸の口へ突つ込んで、かき廻したが、無い毛の出て来る譯は無いのであるから、何うにもし方が無い。魯文氏は何か口の裡で呟きながら、その軸だけの筆を投げ出すと共に、直ぐ他の筆を取つて、それまでの部分を讀み返へしもせずに、例の通りさら／＼と書き續けるのであつた。

魯文氏は學者では無かつたのであるから、長いものになると非常な名文といふものは無かつたのであるが、引札位の短文に至つては、何人も企及し得ざる妙があつたが、ものがものなので、それ等は大部分散逸してしまつて、今日に傳はるものが殆ど無いのは残念であると、或人は語つた。

魯文氏の話では古河黙阿彌氏は文學上の素養の極めて乏しい人であつたと云ふのだ。或る日魯文氏のところへ来て、『瓦罐寺を脚色して呉れといふ注文を受けたのだが、瓦罐寺とは一體何だらう？』と聞いたので、魯文氏は水滸傳中のその話をしたところが、黙阿彌氏は喜んで歸つたが、魯文氏の語つた梗概を本にして作つた劇は實に巧なものであつた。

「彼の男は全く芝居の作者に出来て居る男だ。」

さう魯文氏は稱讚したといふのである。

綠 蔭 茗 話

一、敵 討

一

何か隨筆をとの御注文である。夏向きの事だから、思ひ切り涼しさうなことを書き度いと思ふもの、一寸と好い思ひ付きが無い。其所で、座邊にある古本を手當り放廻開けて見て、宜い加減なことを書き飛ばすことにする。固より人に教へるといふやうな考は無く、又、自分の知識を誇らうといふやうな不量見は尙更持つて居無い。けれども念の爲め斷わつて置くが、何うかすると讀者の誰れかには全然知識の無いやうな事を書くかも知れ無い。さういふ場合には、僕が知識が多いのでは無くして、さういふ讀者の方が知識が少いのだと思はれ度い。

如何なる人も知ら無い事を書くのは不可能であると共に、如何なる人でも知つて居る事を書く

のも等しく不可能である。知識の多い頂上と知識の少いドン底とを想像することは僕等には到底できる事でない。

二

午睡から覺めたばかりの眼を擦つて四邊を見廻すと、『谷干城遺稿』といふ二冊本がある。好し来た、此れで、今日の稿料を稼ぐことにしよう。

講釋でも、芝居でも、淨瑠璃でも、敵討の物語がその主な部分を占めて居ると云つて宜い位であるのだが、そもく敵討なるものは、當時の法律では何う取り扱つて居たのであらうか。生命を以て生命を償はしめるといふのが、當時の法律の根本精神であるべく見えるのに、私人が正當防衛で無い全くの故殺をなすのを政府が公許したのだとすると、餘り矛盾があり過ぎたやうに思はれる。何等か法律上合理に見えるやうな言ひ前が付けられて居たものでは無からうか。

所謂敵になつた人間は、殺人犯であるのだから、敵討ちに出る方の者はその罪人の捜査をするといふ意味で國を出ることを許されたのでは無からうかとも想像せられる。若しさうだとする

と、後者は何かの身分證明のやうな書類位は藩廳から與へられて居たらうかとも思はれる。

享保時分の事であるから、一般の例にはならぬかも知れぬが、僕の家にある書類に據ると、藩士が藩邸以外に住居する場合には、藩から町役人に宛てた證明狀のやうなものを出したやうである。即ち、露西亞のパススポートのやうな意味のものである。で、それから推すと、敵討の連中にも何かさういふやうな書類が與へられて居たかも知れぬと思はれるのだ。

講釋などでは、矢來を結つて、敵討のアレナを設け、役人が出張して、それを監視するといふやうな甚く大仕掛のものであるのだが、果して幾らかさういふことが有つたのだとすると、それは、敵に當る人間、即ち、罪人を處刑する意味であつて、敵を討つ方の者は處刑執行人といふやうな資格で、敵を討つことを許されたといふ譯では無かつたらうかと思はれる。

さういふ取り扱ひは、總て漠然としたもので、これを記録に止めて置く譯には行か無かつたのであらうから、今日では文書に據つての考證はもう行き届くまいかとも考へられる。

所で、敵討は種々で、討つ方が無理な場合もあつたであらうし、敵討をし度く無い者もあつたであらうとは、誰でも考へ得られる事であるのだが、『谷干城遺稿』の『日記』の中に左の如き話が

ある。

「福岡謙三殿を訪ふ。談偶然三谷山にある富永新助氏墓の事に及ぶ、此人の父を伊織と云ふ、甲浦の在藩にて、家老職位の位地なるが如し、或時浦戸城下に人を殺せし事あり、當然の事なれば切勝也しが、其弟甲浦の白濱といふ處にて、伊織に刃傷に及びしが、伊織之を仕留めたり、死者の懷中より書置の如きもの出づ、其文に依れば、此人の母は繼母にて實子あり、家督を實子に與へん事を欲するより、兄の敵を討たぬは腰拔なり杯云ひて、頻りに敵討を勧めたれ共、此弟たる人は兄の死は實に不得已事にして、法に死したれば、相手を敵として討つは反つて不正なりとの考へなれども、母の意はマ、子たる彼を無き者にせん考より酷に責るを以て、不得已死を決し、富永氏に刃向ひしも、實は自ら殺さる、覺悟にして、深く抵抗せざれば、忽ち富永の爲に殺されたり、富永此書面を見て憐を催し、已に兄を殺し、又其弟を殺し、且其弟の心事を察すれば慙然に不堪隣國の阿波より國を立退き來るを勸むる者ありしが、富永は敢て用ひず、遂に自殺せりと云ふ」

三

それにつけて思ひ出すのはメリメエの『コロンバ』である、『コロンバ』はコルシカのヴェンデツタ(復讐)の物語である。

コロンバの父親はコルシカ人に殺されて、コロンバの兄が佛蘭西から歸つて來た。コルシカの風習ではさういふ場合には必ず復讐をし無ければならないのであつて、若し復讐をし無ければ世間から腰抜けだと看做されて齡されぬのであつたので、コロンバは兄が歸つてきたらば、當然復讐に取り掛る事だと思つて居た。處が、兄は佛蘭西で教育を受けて、佛蘭西の軍隊の士官になつて居たので、コルシカ人の持つやうな頑固な考へは失つてしまつて、一向敵を討たうとし無い。けれども、妹のコロンバの方は熱烈な、強い心の女であつたので、何うにでもして敵を討つやうに仕ようと決心して、兄を勵ましたり、煽動したりして復讐をさせようとする。

そのうちに、敵の方がだん／＼不安を感じて來て、コロンバの兄が鐵砲を持つて山を歩いて居る所を狙撃する、彈丸はコロンバの兄の右腕に當つて腕が利か無くなつたが、それでも鐵砲が上手であつたので、左の手で鐵砲を擲んで敵を二人とも撃ち止めてしまつて、妹と一緒に大陸へ逃けてしまつた。

カリメエの『コロンバ』は大體さういふ筋のものだと覺えて居るのだが、執着の強い、烈しい心のコロンバと、しつかりしては居るが文明的になつて居る兄との對照が酷く面白いと思つた。

四

モオバツサンもヴェンデッタを二つ程書いて居る。一つは『コルシカの山賊』と云ふ題なんだが、これはコルシカの山賊のサン・リュウシアといふ名高い山賊の話で一寸コロンバに似たところがある。

サン・リュウシアの父親は同じ地方の若者に殺された。處が、サン・リュウシアは體の弱い、臆病な男であつたので、復讐を企て無かつた。親類の者共も來て頻りに復讐を勧めたのであつたが、それでも承知し無かつた。

けれども、サン・リュウシアの妹の方は復讐を熱望した、コルシカの風習では復讐を企て無い者は喪服を着る資格が無いといふ事になつて居たので、妹は兄の喪服を取り上げてしまつた。それでも、兄は何とも思は無い風で、父の鐵砲を鐵砲掛けから取り下して復讐を企ようとはしなかつた。

つた。彼はまるで父を殺された恨などは忘れてしまつた風で何時も家へ引つ込んで暮して居た。そのうちに敵の若者が結婚することになつて、その連中は大膽にもリュウシアの家の前を行列して通ることになつた。或る日妹と二人で窓の所で菓子を喰つて居ると、その前をその婚禮の行列が通つた。それを見るとリュウシアは何んと思つたのか、フラクと鐵砲を取り下して、何處かへ出て行つてしまつた。が、少し経つと何んにも持たずに、茫然として歸つて來たので、妹は兄は又復讐を諦めてしまつたのだと思つて居た。けれども夜になると、彼は何處かへ行つてしまつた。敵の若者はその晩嫁付きの男を二人連れて、徒歩でコルテといふところへ向つて居た。處がその途中でサン・リュウシアが不意に彼等の前へ現れた。彼は敵の顔をぢつと睨みつけて、『さあ、時が來た』と云つて、鐵砲をさし付けるやうにして撃た。嫁付きの一人は逃げたが、も一人の方は後へ残つて、リュウシアに聲をかけてから、助けを呼びにとコルテの方へ行かうとした。

リュウシアは『一足でも動いて見ろ、足を撃つぞ』と厳しい聲で云つた。けれども、その男はリュウシアが平常から弱い男なのを知つて居たので、『貴様にそんな事ができるものか』と云ひながら馳け出さうとした。リュウシアは、直ぐ、その男の腰へ一發喰はした。で、倒れた男の傍へ

立寄つて、『俺は貴様の傷を見てやる。若し傷が重く無ければ、そのまゝにして置いてやるが、助から無いやうなら、苦痛を止めてやるぞ』と云つて傷を見たが、重傷であつたので、頭へ一發撃ち込んで殺してしまつた。それからリュウシアは山へ逃れて、隙を見ては敵の親類とか、その親しい故舊とかを皆殺してしまつた。

彼は一生の間に、武装巡査を十四人殺し、夥多の家を焼き、死ぬる迄最も恐れられた山賊であつた。

五

もう一回だけ敵討の話を續けることにする。

モオバツサンは又『ヴェンデッタ』といふ短篇を書いて居る。同じくコルシカの物語である。

母一人子一人で人家を懸け離れた海邊か何かに住つて居る一家があつたが、息子が島の誰かに殺されてしまつた。後に残つたのは母親だけであつて、所謂復讐を誓ふべき男の親族といふのは一人も無かつたので、母親が自分で復讐しようと思つた。

所で、その方法といふのが極めて奇抜なものであつた。その婆さんは一頭の猛犬を飼つて居たが、その犬を人間に飛びかゝるやうに教へ込んだ。先づ藁人形のやうなものを作つて、その頸へソオセエジを捲き付けて、犬をけしかけるやうにすると、犬は食ひ物を目掛けて飛びかゝつて行つて、人形の喉元へかぶりつくかと思ふやうな勢で、そのソオセエジを一口噛みにするのであつた。だん／＼さういふ風に馴して行くうちに、犬は人形の喉元へ飛び付くのが全く習慣になつてしまつて、頸にソオセエジを捲いて置かずとも、婆さんが指さして、ソレと聲を掛けさへすれば、犬は直ぐ人形の喉元へ飛び掛つて行つて、其處を一口に噛み破るやうになつた。

婆さんの住所は人家をかけ離れたところにあつたので、婆さんがさういふ仕度をして居ることは誰も知ら無かつた。

所で或る日、婆さんの敵に當る男が婆さんのところへ訪ねて來ると、婆さんは直ぐ犬に飛び付けと命令した。犬は容赦無く敵の男の喉笛に噛み付いて、息の根を止めてしまつた。

六

これはヴェンデツタでは無いが、モオバツサンの作に、『メエル・ソヴァージュ』といふのがあ
る。

普佛戦争の時分に、或る村へ獨逸軍が駐屯して、或る婆さんの家へも獨逸兵が二三人割り當てられた。婆さんの息子は佛蘭西軍に入つて獨逸兵と何處かで戦つて居たのだが、婆さんは家へ割り當てられた獨逸兵を如何にも親切に世話して居た。

所が、或る日、婆さんの息子が戦死したといふ報知が婆さんのもとへ達した。婆さんはその報知に接しても、別に大して悲しさうにも見え無かつた。

丁度その晩婆さんの家から火事が出て、獨逸兵は三人共焼死してしまつた。火をつけたのは婆さんであつた。彼女は息子の死んだ責任をば家に居る獨逸兵へ持つて行つて負はしたのである。獨逸の士官は婆さんの心持を能く理解して、婆さんが謝罪すれば生命は助けると云つたが、婆さんはあやまるどころか、憤然として士官の顔へ唾を吐きかけた。で、士官は己むを得ず銃殺の命令を下した。

所で、此の敵討の話は初めに『谷干城遺稿』を引いたのだから、同じ『谷干城遺稿』の中に書かれ

て居る或る人物に關する云ひ傳へを掲げて、此の項を終ることにする。

土佐の執政吉田東洋は漢學者ではあつたが、氣宇極めて濶大な男であつたことは、谷氏も『遺稿』中の諸所で認めて居るのだが、此の男の學問をするやうになつたのは、復讐事件に關係があつたといふ言ひ傳へがある。吉田は若い時若黨が不禮をしたといふので、手討にした。ところで、その若黨の弟に當る者が、敵を討つと云つて、吉田を附け覗つた。

吉田は用心して引籠りがちになつたので、自然多く讀書する機會を得たのだといふのである。

二、弓の話

一

『武士の片肌涼む夜のかな』

といふ句があると、僕は故川上眉山君から聞いた事がある。夜的是普通夏の事になつて居る。今日では電燈が出来て居るから、何處から燈光を探ることも自由であつて、燦の採光には不便が

無からうかと思はれるのだが、往時のランプ時代には探光が十分で無かつた。

照り返しの附いたランプを——硝子箱に入れてあるのを——壕の左右の上の隅へでも吊すといふことにすれば——壕の可なり大きい場合には——宜しいのであつたらうが、僕等はそんな面倒なことをせずに、何時も夜は的を壕の中央へ唯一つ掛けることにして、その的を掛ける場所の前の直ぐ下を少し掘つて穴を拵へ、その穴の表面の半分位後部を板で掩つて、その上へ土をかけてその餘半分位(前部)な所からランプを穴の中へ入れるといふ仕組にしたのであつた。

即ち、さういふ風にして穴へランプを入れると、燈光が的へ當つて、的だけが闇い裡でハツキリと浮き出して居るやうに見えるのであつた。

併し、此の方法には少くとも二つ缺點があるやうに思はれた。

その第一は地面へ殆ど平に掘つた穴であるから、何うかすると雨水が溜る處のあることであつた。第二は、燈火が殆ど的へのみあたるやうになるので、的ばかりが明るく見え過ぎて、射手の心を挑發し過ぎて、知らず／＼射前を匆卒ならしめる傾きのあることであつた。

故に夜的の壕の探光の方法は、燈器を入れる穴を掘らずに濟み、且、その投光が的へばかり集

中しないことになるやうなのが一番宜しいかと思ふ。

三

夏は日中は餘り暑いので、人間ばかりで無く、弓そのものがぐだぐだになつて居るのであるから、夜になつてから、幾らか空氣の引締つたなかで射る方が面白いので、夜的が行はれるやうになつたのであらうと想像せられるのだが、夜的は弓術練磨の上には餘程有益なものである。

前に云つた通り、夜是的のところだけが一番多く光を受けて居るかのやうに思はれて、的へばかり心が引き付けられるので、唯引つ張つて放しさへすれば皆中るといふやうな氣になつてしかたの無いもので、何うしても射方が早くなり勝ちで、従つて十分に引いて放さないことになるのだから、普通の晝間のやうな心持で行くと、矢が極まつて的の後(向つて左方)の肩のあたりへ塊まつてしまふ。で、思ひ切つて的の前(右)下へ拳を當て、引つ込むやうにして、早いところでトントン射て居るのも一方法には相違無いのだが、然しそれでは唯中るだけのヨタな射方に過ぎ無い。夜的の場合には、弓を十分に引いて、十分に長く保つやうにして射れば、殆ど百發百中である。

夜は的が闇の中で浮き出して居る譯であるので、それを目標にして射る矢は何處かへ塊まつてしまふのが自然であるのだから、是を正法の射方にするとは始終好い射方が揃ふといふ譯である。

だから言葉を換へて云へば、夜はほんざいな射方では、探り探り射て居るやうなもので、甚だ不安であつて、何うしても正法の念の入つた射法によらなければならぬことになるといふのである。其所で、その通り正法に依る練習を夜的でやつて置くと、早けと稱する引つ張ると直ぐ放す病などはだん／＼と治せられて行くと思ふ。

心の落ち着、心の集中は何うしても夜の方が宜い。弓を十分に引いて、心を丹田におさめ自分の心の鏡へ自分の姿勢を寫して、心手一緒に完全の域に到らうとするその心境を私の師匠はよく『澄み渡る』といふ言葉を用ひて象徴した。確に『澄み渡る』といつて宜い心持である。

三

僕は冬の夜弓を射るのが好きであつた。殊に初冬の夜が好かつた。

射るには一般には白木を貴ぶのだが、京都製の白木は夏は使へ無いので秋口から使うのである。

秋になつて、白木を持ち出すことのできるやうになつた場合の快さといふのは、なか／＼忘れられ無い快味である。

所が、初冬になつて来ると、弓が一層締つて、夜などはその扱え方があり／＼と感ぜられるやうな氣がするのだ。絃音などが如何にも引締つた好い音がするやうになる。

射手の心が初冬の夜には殊に澄み渡ることが出来るのだ。

四

堅物かたものといふのがある。これは鍛ひ鐵の板とか、鏝とか、兜とかを射抜くのをいふのであつて、矢の射抜く力を試すものである。

此れは勿論遠距離でやるのでは無い。今手元にある本では一寸その距離に對する定めを調べることができ無い。いや、それどころか今僕の本箱に在る射法の書、即ち『古事類苑』の武技の部『射法三部書』、『本朝射法史』、『弓馬要覽』位なもの、中には、堅物のことは一切書いて無い。思ふに、小笠原などの流義に無いもので、極く後世になつて始まつたものであるが故に、以上の如き

割合に古い書中には載つて居無いのでもあらうか。

堅物の距離は精々五間位でもあらうかと思ふ。僕の師匠が晩年に鎧と兜を射たのを見たことがあるが、其時の距離はもつと近かつたのでは無からうかと思ふ。或は三間位であつたかも知れぬ。その時は鎧も兜も名作物といふ程のものでは無かつたらしかつた。弓は七分位のものであつたに拘らず、鎧にも兜にも容易に矢が徹つた。

堅物を射るのは無論根矢であるのだが、その根即ち鏃は長い柄即ち軸の附いて居るのをを用ゐる。筈に此の鏃を附けると、軸の端が矢の元矧位なところまで來ることになるのである。

斯ういふ矢が堅物に徹ると、矢の羽はな中位のところから折れて飛んでしまふといふことを聞いて居たけれども、僕が見た時の、的になつたものが、本式の堅物では無かつたせいかも知れぬが、箭は其のまゝで立つたのであつた。

五

堅物のことでは、僕の師匠が面白い話をした。

或る時、五六人で、何處かの旗本邸の射場へ、道場破りの格で出掛けた。的の方では到底勝て無いことが分り出すと、主人方では、堅物を射ようと云ひ出した。距離は十五間で、鍛ひ鐵を射るといふのであつた。道場破り連は、此の十五間といふので、先づ度膽を抜かれた。

で、いよいよ始めるといふと、道場破り連は、尾州の星野の社中の者であつたので、皆七分以上の弓で射て居たのに拘らず、皆矢が反ねかへされてしまつて、誰の矢も徹ら無かつた。

次に、主人側が射たが、此れは皆六分五六厘の弓であつたのに、當つた矢は何れも皆スポツスポツと徹つてしまふ。道場破り連中全く顔色が無かつた。

が、少し考へると何うにも合點が行かぬので、客の方で一番年若であつた僕の師匠が、お矢取りは私がと云ふが早いか、跣足で駆け出した。主人側はお矢取りは私どもの方でと、慌て、止めたが、間に合は無かつた。

客に射させたのは鍛ひ鐵であつたのだが、主人側の番になると、矢取りの手で、並の鐵板へ墨を塗つたのと摺り代へてしまつてあつたのだ。

「やア、貴君方のと吾々のとは的が違ひますよ」

まだ子供だった私は遠慮も何も無く、斯う大聲で云つたものでしたと、師匠は笑ひながら話した。

六

僕の師匠は關口源太と云つて、若い時分尾張へ行き、星野家に入つて修業した人であつた。富士見町(牛込門内)で三合舎といふ道場を開いて居た時分には随分社中も多かつたやうであつた。

僕は關口氏を知つて居たのは、餘程前からであつたが、正式にその道場へ稽古に行きだしたのは、關口氏が牛込白銀町へ移つてからであつた。其所へは、故和田垣謙三氏も來た。故有地品之允氏も來た。故高木豊三氏も來た。

が、殆ど毎日のやうに稽古に行つたのは故渡邊寛綱といふ子爵と僕とであつた。

和田垣謙三氏の弓は少し引きが足りないやうな形で、少し上の方で釣り合ひを取つて居るといふ風の射方であつたが、當る日だと無暗にボンボン當つたが、出來の悪い日になると氣の毒な位

矢が亂れた。

合間には例の輕口でさんぐ、吾々を笑はせた。或る時、和田垣氏は尾崎紅葉の連中から、下總の猫實へ牡蠣を食ひに行かぬかと誘はれたが、用事があるので斷つたといふ話をして、

『其處で、我輩は澄めるは負け濁れるは勝ちにけりと云つてやづんだが、どうです、解りますか』

と、云つた。勿論、吾々は牡蠣とも猫實とも少しも聯絡が無いことやうに思つたので、何うも解ら無いと答へると、和田垣氏は少し早口に、

『がき(餓鬼)がかき(牡蠣)を食ひに行つたといふんです。食ふ方は勝で、食はれる方は負けでせう』

と云つて快氣に笑つた。それから、直ぐ、

『かきの字のつく者は皆えらし、板垣伯でも和田垣博士でも、といふのもあります』と、云つて、さも面白さうに笑つた。

又、或る時、和田垣氏が、

『紅葉がね、我輩の謠を聞いて居て、名月や此の謠をば玉に疵と云つたから、我輩は聲に應じて名月や此の謠をば疵に玉と云つてやつた』

と、話したので、吾々は
『それは、何うも先生の方が勝のやうですな』
と、云つて、大笑ひをした。

和田垣氏はマドロス・パイプをくはへて、弓を引いたが、有地氏は葉巻をくはへたまゝで弓を引いた。有地氏は極く眞面目で、冗談口などはきかなかつた。

有地氏は、肩がヘンに引けて居るに拘らず、なか／＼しつかりした射前であつた。弓力も老人としては可なり強い方であつた。大抵六分七八厘位なところを射て居られたやうであつた。

此れは、誰でも氣が付いたところらしかつたが、有地氏位達磨に似て居た人は一寸無からうと思ふ。氏自身もそれに氣が付いたのだと見えて、氏の署名は品之允の三字で實に巧に達磨の形を描いてあるのであつた。

有地氏の屬して居た貴族院の分科に今一人達磨さんが居た。それで、豆腐居士と署名して狂詩

を作つた人があつた。その轉結は

『○○分科禪味多。白眼相對達磨』

と、いふのであつた。豆腐は即ちおかべであるから、豆腐居士は岡部即ち子爵長職氏の戯れに號した名であつた。

七

白銀町の關口の稽古場では、よく富井霞章氏とも一緒になつた。

富井氏は勿論冗談口などはきかれなかつた。その點では、和田垣氏とは全くの對照をなして居た。

富井氏はもう随分長く關口の稽古場に来て居られたやうであつた。道具の古さなどから見て、それは明であつた。

誰でも少し長くやつて居る人は、道具などに幾らかの好みが出来て、代へ弓を一二本は買つて見るとか、餘分の矢を拵へるとかいふやうなことが必ずあるものなのだが、富井氏に至つては、

一向さういふところは見えなかつた。

何時も、赤みが、つた塗りの弓一張きり、矢は鷹の羽を矧いだ殆ど白篋のやうな、太い丈夫一式なのを使つて居られた。

白銀町へ關口の稽古場が移つてからは、富士見町時分からの連中は僅三四人しきや見え、しかもそれも全く時たまのことであつたのだが、富井氏だけは月に二三遍は必らず見えるのであつた。何でも、師匠の話では、富井氏は他の人々のやうに一時熱中してから直ぐ止めてしまふやうなのでは無く、始めから絶えず同じ調子で、何時までも、止めないでやつて居られるのだと、いふのであつた。

僕は、さういふところにもよく富井氏の謹嚴な性格が表はれて居るのだと見て、甚だ面白く思つたのであつた。

富井氏が見えると、何時もの弓が張られ、例の太い矢が十本程立て、ある竹筒の矢立が持ち出される。富井氏はその矢立から矢を取つて弓へ番へ、頭を少し後へ反らせて、高々と打ち上げて、勢好く一氣に肩まで引き渡して可なり長く固めて居て射放たられる。如何にもきちやうめんな、

正直な射方であつた。

八

誰が始めたとも無く、白銀町の稽古場では、滑稽な賭をやりだした。それは斯ういふのであつた。即ち、三四人集まると、四本宛射で、尺二の的の星へ入つた者から順々に責任を解除されて一番後へ残つた者は罪として或る用が云ひ付けられる。その用といふのは、焼薯を買ひに行かせられるのであつた。かけを指したまゝ、袴を穿いたまゝで、焼薯を買ひに行かなければならないのであつた。金銭は他の連中が出すのであつた。

四月か、五月頃であつたが、師匠は京都の武徳會へ行つて居て、その留守は、來る人の相手をする事などは、渡邊寛綱氏と僕とが頼まれて居たので、二人は絶えず稽古場へ顔を出すやうにして居た。

或る日の午後、渡邊氏と僕とで頻りに射て居ると、其所へ富井氏が入つて來られた。所で、その日は富井氏の矢がよく星へ入る。其所で、僕は『今日のやうな日に焼薯の賭をやれば、吾々の

方が早速買ひにやられちまうね』と云ふと、富井氏が『やりませうか』と云はれるので、いよいよ賭が始まつた。僕は運好く最初の矢が星へ入つた。渡邊氏もその次ぎの立て、星へ入れて、富井氏だけが残つてしまつた。

まさか富井氏に薯を買はしにやる積りは吾々には無かつたのであるから、唯大笑に笑つて居ると、富井氏は生真面目な顔で『風呂敷と金は』と云はれた。吾々は師匠の妻君に風呂敷を出して貰つて、金と一緒に富井氏の手へ渡した。

九

稽古場の隅に腰を下して居た富井氏の若い車夫が腹を抱へて笑ひこけて居る間に、富井氏は羽織も着ない袴姿のまゝで、薯を買ひにと出て行かれた。

彼の横丁は電車道になつたが爲めに今は半分以上無くなつてしまつたが、當時は極く狭い路であつて、稽古場の路次を出てから、右へ二三十間行つた南側に焼薯屋があつたのである。やがて、富井氏は薯の入つた風呂敷を提げて歸つて來られた。

『これは恐縮でした。でも、これが和田垣さんだと興になりませんが、先生なんだから、大きに興になりましたです、まことに苦勞さまでございました』と、僕が笑ひながら云ふと、富井氏は、笑ひを呑んで、

『私が薯屋から出て來ますと、知つて居る海軍士官に逢ひましたが、先方では叩頭をしながら私が不思議な家から出て來たので、ヘンな顔をして見て行きました』と、落着いた調子で云はれた。

『いや、ますく傑作ですな』と、云つて渡邊氏も笑つた。

十

白銀町の稽古場へ行つた時分は僕もまだ三十を少し過ぎたばかりであつたので、力だめしだと云つては、七分位の弓を二張合せて置いて、素引きを試みたり、八分餘の弓へ無理に矢を掛けたりしたのであつたが、師匠は笑ひながらそれを見て居て、次のやうな話をした。

『馬場さんは大分力をお出しになります、私も一度斯ういふことがありました。まだ私の二十

愷の時で尾張の星野の家にゐた時分のことですが、名古屋の郊外の或る神社に寸五分の弓があると聞いて、それに一つ肩を入れてやれといふので、星野の息子二人と或る日出かけたものです』

神主に掛け合ふと、誰も張る人が無いから、到底駄目だと云つたけれども、此方は、ナニ張るだけならば、吾々が張るからと云つて弓を出させて、何うやら斯うやら弦を渡してしまつた。

最初に星野の息子の兄の方が肩を入れやうとしたが、額のところまで引いたのみで、それから何うにもならなかつた。

「では、俺によこせと云つて、ウンと一つ力を出して引いたんですが、額のところまで来ると、ゴツチリ支へて挺でも動きさうもありません。おい、誰か、一本指で俺の脇を押せよ、と云ふと、星野の弟の方が、私の右の脇を一本指で一寸押しました。すると、それで、難無く肩がぐツと入つた。何うだ、これ見ろといふんで、暫時そのまま、で居てから、絃を元へ戻して、弓を置いて一寸すると、一寸位の火の棒のやうなものが眼の先をヒュツ／＼と飛びだした。おやへんだぞ／＼と云つてゐるうちに、ウウンと云つてひつくり返つてしまひましたね、皆な大騒ぎ

になつて、介抱してくれたので、息は吹つ返しましたがね、それからといふものは、私は決して無理はしませんですよ』

十一

『本朝弓馬要覧』の第一巻に左の如き物語が載つて居る。

『吉田印西老其古いまだ葛巻源八郎といひし頃、讃岐に下る事ありしに、好事の槍術者ありて、源八郎が射術と勝負せんと乞ふ。源八郎固辭すれども、槍術者不用、たとへ源八郎が鎌、我腕を射透すとも、一本の矢なんぞ恐るゝにたらん、唯一槍に突殺さんと罵つたてやます。源八是非なく立向うて矢を番へば、槍術者も槍を捨てかゝる、源八弦をきつて發せば、槍術者あほぬきに倒る。起きかへつて飛かゝらんとすれば、早く二の矢をつがへり。槍術者槍をすて、閉口し、段々誤りをいひのぶ。傍の人、始の詞にも不似合事かなといひしかば、槍術者の云、如何にも征矢にて射貫かば始いひし言のごとくならん、源八は妙手なる哉、案に相違の神頭にて射侍れば、中るとひとしく轉倒せり、是非におよばずといひしとかや』

十二

「頼光朝臣の郎等季武が従者屈竟の者あり。季武は第一の手き、にて、下針をも射はづさず射ける者也。作の従者季武にいひけるは、下針を射給ふとも此男が三段斗のきて立たらんをば得射給ふまじといひけるを、季武やすからぬことをいふやつかなと思ひてあらがひにける。若射はづしぬる者ならば汝が欲する者を所望にしたがひてあたふべしと定めぬ、己れはいかにといへば、是は命をまるらするうへはといへば、さらば立といへば、此男いひつるごとく三段のきて立たり、季武はづさじとよつ引て獲しければ、左の脇の下五寸許りのきてはづれけり。季武やすからず思ひ、又射るに、右の膝下五寸許りのきて射はづしぬ。此男さればこそ得射給ふまじと申したれ、手き、にてはましませど、いちづに眞中をねらひ給ふ故左右へはづせばはづる、なり。始めより其意をしたまはぬ事よといひしかば、實にあやまりたりとて笑ひてやみぬとかや」

季武の矢は二度とも規つた元の矢坪を違へ無かつたので、従者はさういふ風にかはすことができたのであらう。これが下手の矢先に立つたのだと、戻つてさうは行かなかつたであらう。狐が

下手の矢がこはいと云つたといふ話が思ひ出られて、面白い話だと思ふのである。

十三

「那須與一資高西海にて扇子の的を射、源平の稱美に預り、其榮高し、後鎌倉にて右大將家諸大名高家を召集め遊宴の折柄、鶯の來りて花をちらす事ありしに、右大將家落花らうぜきあれ射留よかし、はづしたらんは無興なるべしと、射手をえられしに、幸に與一資高あり、則資高をめし、あの鳥の羽節許を射て、活鳥にして得させよと仰事ありしかば、與一弓に矢をとりそへ、しばらく矢もつがはずたちやすらひて、時をうつし、又矢をつがひ引たもちてもはなし得ず、又矢をはづせる事兩三度、其隙に鶯はいづこともなく飛去けり、右大將家を始めとして諸大名皆云、惜哉鶯飛去らずば、資高上意のごとく射得んものを、何とて與一はかくまで隙どりけるといひしに、與一心やすき友に私語しは、彼鳥を射得ん事も有べし、射得ざることも有べし、射得たりとてさのみ高名ともなるべからず、射得ざる時は瑕瑾となるべきか、資高西海において稀有に扇子を射得、諸人の褒美に預り、功成名遂て身退く、無用の高名はせざるにしかじといひけりと、古

き弓物語といへる書にしるせり。舊史實錄にしるさるるところ、いぶかることなきにしもあらざれども、いさゝかこゝにしるす』

勿論、此の話は後世の武藝者か何か、拵へた話なのであらう。作者の目的意外に一寸と皮肉なところもあつて、可なり面白い話である。

三、馬の話

一

『立馬原頭見榮花』といふのは、山内容堂の或る詩の結句である。馬術に巧みであつた容堂に如何にもふさはしい句であると思ふ。

容堂の父であつた雅五郎といふ殿様は、馬が好きであつたので、馬を乗り馴らす際に、容堂をば殆ど馬丁の如く使つた。

舊馬術では、駒を乗り馴らすのに、輪乗を掛けたりするには、馬の頸へ綱を結んで置いて、

下に一人居てその綱を執り、騎者の指圖に従つて、その綱を引いて、馬の方向を種々に變へさせるのである。これを和鞍の方では頸繩と云ふのである。頸繩を引くには、勿論跪足で尻をからけて駆け廻らなければならないのだ。

容堂は雅五郎氏の爲に頸繩を引いたのであつた。

傍系とは云ひながら、大守の連枝たる貴公子であつたのだから、頸繩を引くことまでやつたのは、馬の稽古としては、十分なもので、さういふ貴公子に取つては稀有なことであつたであらう。容堂の馬術は全く殿様離れのした達者なものであつたと傳へられて居る。

京都で参内の時などは、馬を川へ乗り入れ、道も無い堤を乗り上つて、『青公家どもは此ういふ道を通れる氣遣ひはない。皆來い〜』と云つて、ヅン〜進んで行くといふ風であつたので、遅く宿を出でながら、誰よりも先へ参内したといふのである。

二

或る時、式臺先で馬に乗つて鎧を踏むと、カチンと云つて、力金が外れて、鎧が延びた。容堂

は『喜五郎々々』と、馬頭を呼んで、鑑を直すことを命じた。馬頭は力革の何の邊の穴へ齧めて宜いのか分らないので、一寸躊躇つて居ると、容堂は『上から三つ目』と直ぐ云つた。何年にも自分では鞍など扱つたことの無かつた容堂が、自分の鑑のこと、は云ひながら、直ぐに穴の順を云ひ得たのは、馬術者の心得を忘れなかつたものとして、稱讚に値することだと、その時の馬役であつた僕の父は語つた。

三

容堂は仙臺馬の松島といふ馬が好きであつた。が、此の馬は上肝の荒馬で、乗らうとすると蹴つたり、跳ね上つたりして、扱ひ難い馬であつた。

僕の父が馬役になると、直ぐ松島の乗せすまひをする癖を直しにかゝつた。馬を馬場の真中へ引き出して、馬頭に『貴様しつかり押へて居れよ』と云ひ付けて置いて、僕の父は、松島の右から乗つて直ぐ左へ下り、直ぐ又左から乗つて右へ下りるといふ風に、乗り下りを続けざまにやつた。毎日々々それを続けながら、一方では厩へ行つて、飴を手の平へ乗せて食はせたりして、だん

だんと馴らして行くうちに、さしも荒れ立つて居た馬の氣も次第に落ち着いて来て、見違へるやうにおとなしくなり、乗せすまひなどはもう全くしなくなつた。

それまでは、容堂の愛馬であつたに拘らず、松島が餘り荒いので、馬係のものが心配して、何か口實を設けて、成るべく容堂の乗用には供さないやうにして居たのだが、此に至つて、もう何の心配もなく容堂の乗用に供したので、容堂はその松島ばかりに乗つて出るやうになつた。

四

所が、或る時、僕の父が式臺へ松島を横付けにして、その口を取つて、主人の出て来るのを待つて居ると、お坊主が主人の草履を持つて来て、式臺へ置いた。

『ハテ、少し後過ぎるな』とは思つたが、馬はもうどんな事があつても跳る氣遣ひは無いと信じて居たので、その儘にして待つて居た。

其所へつか／＼と出て來た容堂は草履の位置を見ると、突と馬の肩へ沿うて立つて、右の足を伸して草履を自分の方へと引き寄せて、それを穿いて、馬に乗つた。流石に心得のある動作だと、

僕の父は心の中で感服したといふのである。

五

容堂が土佐藩の軍艦に、夕顔船とか、胡蝶丸とかいふ風に、源氏五十四帖から選んで名をつけたことは誰も知つて居ることである。

或る時、容堂が近侍の者に、『馬に名をつけるなどはいらんことである。馬はそれ／＼毛色が異つて居るのだから、青なら青、栗毛なら栗毛で分るではないか、以來馬の名を稱へるのは止せ』と云つた。

『上には斯ういふ御意だが、何うしたものであらう』といふ相談が僕の父にあつた。僕の父は、『いや、それならば宜しい。これから、馬の名はよしてしまつて、青とか栗毛とかいふだけにしよう。それで、上が青を引くと仰しやつたら、有るだけの青馬を三四でも四匹でも御前へ引て出ることにはしようでは無いか』と、云つた。

その後になつて、容堂が栗毛をと云ふと、馬役は栗毛ばかり四五匹容堂の御前へ引き出して、

『何れに致しませう』と伺つた。

『同じ毛の馬がさう何匹もあるのか』と、容堂は笑つて、『それでは、名が無ければならん譯だな。俺が一つ付けてやらう』と、云つて、容堂自身で馬にそれ／＼名をつけた。

それは皆、胡蝶、篝火、須磨、明石といふやうな、源氏の帖の名から選んだ優美なものであつた。

六

『馬などは乗つて置くには及ばん。馬役など、いふものは無用なものだ、といふ御意なんだが、何うしたものだらう』と、僕の父に、容堂の側付の者から相談があつた。僕の父は斯う答へた――

『他の殿様だとさういふ譯にはいかんが、此の殿様なら、馬が何れ程暴れても落ちる氣遣ひは無いし、その他の間違ひもある氣遣ひは無い。それは私が請け合ふことができる。さういふ御意なら、馬は一切乗らずに置いてみようぢやないか』

それから四五日経つと容堂は張り切つた松島に乗つて、友候訪問か何かに出掛けたが、その歸りに、馬が烈しく駈け出さうとした。引つかけられては堪らぬので、容堂は両脇へ手綱をぎりぎり捲き付け、鞍の後輪へ背中を附けるまでに、反り身になつて、馬を抑へつけて、駈けださせず、に邸へ歸つて來た。

出迎へた馬役に口を取らせて、下りると、「馬をちと乗つて置けよ」と云ひ捨て、ツーツと奥へ入つてしまつた。

七

馬を馭するは人を御するが如しなど、昔から云ふのであるが、下手な馬術者や、馬喰ふは馬を馴らすのに、如何にも亂暴な方法を用ゐたことが、『本朝弓馬要覽』の馬術の部に書いてある。その一二を擧げると、左の如くである。

『下口つよき馬又は首根強き馬は、土俵を付けて仕込む事』

『舌を出す馬をば、火箸を焼て、出す舌に押當て直す事』

『込馬をば首に繩を付置て、込時、彼の繩をつよく引しめ、咽をいためて仕込事、總じて、下俤の馬をば鞍下鑑すれなどに物を當て乗事』

『轡はのほつし入外ほつし惡しき馬、又人喰ひ馬をば、棒を燒き、口の内へさし入れて、咽をかきまはして、馬に惱を付けて人を欺く事』

『去博勞跳馬を直すことの勝れて得手なりとつねに語れり、或る時さる人いとうつよく跳る馬を持ちけるが、彼者にたのみて乗にければ、件の馬に、陰囊に細糸を付て腹帯に結付乗けり、されども、彼馬其仕懸を用ひず、なほつよくはねければ、乗人も鞍にたまらずして落ちぬ。まして馬は陰囊をしめ切て其傷にて死にけり』

『馬の齒を磨て、歳をなん若く見せて、利買をなして世を渡る者あり……年老ぬれば、馬にかぎらず、人も齒の長伸るもの也、さるによりて、鏡やうり荒砥などをかけて、齒のたけを磨詰、齒の内をも掘て、ふしかねをさし入、六歳齒の、七歳など、云ひて、人の目をくま悶す事なり、しかれども拵へたる齒なるゆゑ、向齒、牙のみわかきとみゆれども、奥齒は拵へがたきゆゑにながきなり、さるによりて、物食時奥齒は合ふといへども、向齒はさらに合ざるにより、大豆、粥、糠をこほ

して、嘯事かたし、まことに、此時毎に、其人を馬のなかうらめしく思はざらんや」

八

しかしながら、正法の馬術の本意は濫りに馬の本性を曲げるべきもので無いと云つて、次の如く説いてある。

「むかし、或乗人のいへるは、馬の生れ付より外の足を乗事なかれ、強て乗れば、四足おとろへ村血出来てあしく、後にはつかれあしとなり、早き馳もとまるものなり、ましていはんや、翔など乗度毎に追事なかれ、必ず馬の氣亂れ、息をして病馬となるべし、此義は乗人ことにつゝしむべき事とかたれり、しかあれど、翔は堅きを碎き、危きをのがるゝものなれば、時々は翔をもくるしからざる事なり」

「或人の云ひしは、馬乗者の心持よくして、執行のいたりたらんは、其家もさかんにして、流義四方にみち、子孫繁昌ならん、下手の色々と惱まし、痛み勞れたるをも、なにとなく、其あしくなりたる心根をよく知りて、おのづと直るやうに乗るなり、少しも私の思ひにひかれず、たゞ馬

の困窮して曲となり、朝にすたらんことをなけきて、馬の爲めとばかり思ひて乗るは、おろそかにはすることなく、無理を乗らざるゆゑ、我と馬と和合になりて、曲ある馬は曲を忘れ、直なる馬はいとつものらん」

「入外あしき馬も、口よく乗らば直る事ありと古人もいへり……馬は本より引重致遠の徳を具へて、人に随ひ里に住ものなり、此故に、奥歯と牙との間二寸ばかりがほどは、齒はへざるものなり、是自然の理にして、轡を嚙べき所以也、しかれども、底口痛むか、または、かうかけ引か或は飽乗をせられし馬などは、必ず轡をおそれて、はめはづしあしくなるべし、能々心を付て、其趣を乗ぬれば、大概直るもの也」

四、槍 の 話

一

「宗耕が云けるは、可兒才藏、寶藏院に逢て云には、我元來槍法を知らず、槍は如何にして勝を

得るやと、院答、上段下段相かぶりの外なし、才藏解らず、主人福島左衛門大夫へ、この術を習はんと告ぐ、福島許す、可兒よはち廼南都に往て、院に此術を習ふこと日あり、歸つて戰場に赴くに、還つて怯心起て進むに難し、因つて復南都に往き、實を以て告ぐ、院曰、知ること未だ半也、可兒更に學ぶこと數月、得て歸る。是より敵の槍道を視ること明にして、廼我が勝路を得たりと。又この寶藏院、今に繼目には、關東に下て拜禮をなす、此時僧の從に槍を持たすと。寶藏院退院しては、觀音院と號す。又この院にては、十文字とは稱せず、月劍と呼ぶ、これは元祖寶藏院は、もと直槍なりしが、或とき八日の月影水面にうつるを視て、あはれ、直刃に斯く横手を加へん者をと、因て十文字の形を作つて、月劍の名ありと云ふ』

二

所で、寶藏院のことは『武藝小傳』に據る時は、左の如くである。『寶藏院覺禪房法印胤榮は中御門氏、南都の僧徒、釋門たりと雖も、刀槍の術を好む、柳生但馬守宗嚴と共に刀術を上泉伊勢守に學ぶ、又大膳大夫盛忠なる者あり、槍法の達人なり、諸州を修行して南都に來る、胤榮盛忠を

寶藏院に留めて、槍術を學ぶ、既に熟す、履を取り胤榮に従ふ者多し、中村市右衛門尙政獨其宗を得たり、胤榮釋門に在つて武事を業とするもの固より本意に非ず、吾後嗣必ず武事を學ぶ可らず、武器無きに如かすと、故に兵器若干、以て中村に授く、寺中兵器無きなり、後嗣權律師禪榮房胤舜十九歳の時、胤榮寂す、時に慶長十二年丁未正月二日享年八十有七、胤舜想ふ吾が此寺は、釋氏の遺經の故に非ず、唯先師胤榮槍術の故なり、其槍術を繼ざるべからざるなりと、寶藏院の邊に奥藏院なる者あり、日蓮黨の僧なり、此の僧先師胤榮に従つて精妙たり、故に胤舜これを招き、日夜勉習、終に其の極に至る、槍法の神に入る者と謂ふべきなり、慶安元戊子年正月十一日、享年六十にして逝く、覺舜房法印胤清、胤舜の嗣法を繼ぐ、又槍術の妙を得たり、元祿十二己卯年四月四日逝く、六十五歳、或は曰く、胤舜十六歳の時胤榮逝くと、按ずるに胤舜は天正十七年生なれば、慶長十二年胤榮逝く時、十九歳ならんか』

三

『管鎗は慶長の頃、江州佐和山の主、大谷刑部始めて作る所也、刑部は病ふ事ありて、手の中心

にまかせず、よつて管鑰を工夫すと也、事始めに云ふ、手ほう左馬之助始めて作ると有。

按、手ほうといふ苗字未だしらず、さだめて異名なるべし、手ほうといふによりて見れば、刑部が手のうち自由ならざるといふにひとし、刑部を始めは左馬之助といへるか、まさしく同じ人なるべし』

『今もてはやす管やりといふものは、元祖すやり上手なりしが、左の大指を落して、たゞつかはれぬゆゑ、手くびにくだを結付てつかひし也、其弟子ゆびの全きをわすれて、同じ管をもちひ、今に至りては、はしりのため、つきのためなど、遁辭をかまふ、今は妙術あるにもせよ、もとは變より據なく出たる管なり、其術の巧拙を論ずるにはあらず、その本意を失ふをこゝにしるすのみ、道理を知らぬ管やりつかひが聞かば、さぞ腹立べし、よくがてんがゆかば、管をくだきて可なり』

四

『大内無邊は出羽國横手郡大内莊の人なり、戸倉川の澗に生長し、鮭魚を捕を以て業となす、其

浪長竿を取て上りくる魚を鉤子つがひで砂上へ撥あけ、日々數十尾を得る、遂にこれを以て槍を弄たがふ術を工夫し得たり、郡中の士人従つて遊ぶもの多し、無邊の業ますく進み、近國より來り學ばむを請もの、歴々として算るに暇あらず、無邊が云く、我家貧しく母老たり、一日も徒に幽隙を費すべからず、我業を學ばむとならば、共に川邊へ來れとて、從遊の士を具して、戸倉川の邊に至り、長竿を揮うて水を鉤子ひきかけす、從遊の士あやしみて、先生何の戲をなすや、無邊云、鮭魚さかりに上り、我既に數十を得たり、公等これを見ることなきやと云、從遊の士驚いて云、先生狂せるや、更に一尾の鮭魚なしと云て、且怪み、且疑ふ、無邊また云、我竿の上に數十の魚あれども、公等の眼に一尾の鮭魚なし、公等の眼中は川の中にあつて、我手を見ず、これ竿頭に魚なき所以なり、重て我手を見て、魚の有無を知と云て、また川水を鉤子す、一人の云く、魚あり大なりと云、無邊笑うて云ことなく、又川水を鉤子す、一人の云く、魚あり小なり、無邊また云ふことなく、川水を鉤子す、一人の云く、魚なし、其時、無邊その士を招いて云く、公すでに我業を知り、これより後うむことなくば、自然精妙に至むと云、その人云く、精妙は我にあり、至も至ざるも皆これ我によれりと云て去、此人別人にあらず、山本郡の人にして、後に無邊の名を

つぎ、山本の無邊と云これなり、或云、大内無邊槍法に善しと云ふを以て、出羽の國の一城主に仕ふ、城主の家人みな推て師となす、無邊すなはち同國山本郡眞弓山の神に祈て、其法の次序を立んと欲し、夜々山上に詣り、路暗くして松杉の枝垂たれば、白日なほ人の昇り煩ふ處なるに、夜は更たり伴はなし、寂寞もろまじしき時なるに、誰とも知ず、樹木の際わたりより、ゑいと云聲と共に、枯木の枝を投出したるが、無邊をうと聲かけ、その枝を取、とれば投出し、投れば取ること數十次に及ぶとき、無邊が立たる岩石潰崩て洞底に陥ると云ども、無邊けし飛んで傍に立てり、時に大雨淋漓たり、無邊雨中に立つて窘とせず、漸く神前に至り、通夜して神助を祈ること懇々たり、其曉神告けて云く、前に汝を試みしことあり、汝よく思はゞ必自得すべし、二度我に向つて無用のことを祈るなかれとなり、無邊家に歸り、即ちこれを推測して、槍法の次序を定むと云へり、其後無邊の子上右衛門かみこの技をつぎ、世に名あり、上右衛門の子を清右衛門と云、尤祖父の藝を襲で、精妙に至る、其門人樵名靱負助この術を傳ふ、世人これを神變なりと云、大内無邊流と稱するに至るとなり」

五

或る殿様を教へて居た槍の師匠が、高弟を度々代稽古に出したが、或る日その高弟が師匠に斯う云つた。

「殿様も此頃では大分御上達のやうですが、此方からもちと突いてみませうか？」

師匠は、それは以ての外だといふ顔付で、次のやうに答へた。

「上つ方のお稽古は吾々とは全く譯の違ふものだ。俺は少し量見があつて、殿様をあゝいふ風にお稽古申し上げて居るのだ。おれの槍先きには名人の師匠でもわけなく突き留めることができるといふお心持ちにさへして置きさへすれば、いざとなつた場合存外剛敵をお仕留めになることもあらう。それをお前が突いて見ろ、さういふ英氣が挫けてしまつて、唯の下手になつておしまひなまつて、俺の考へも無駄になつてしまうのだ。いや、決して此方から突いてはいかぬ」
「僕は此の話しを甚く面白いと思ふ。此れに就いて思ひ出すが、或る義太夫語が「素人の稽古だと、でき無いといふところは、宜い加減にしてしまうのですが、文人の稽古では、でき無いでは

すまざすに、幾月か、つても構はず、其所ができるまでやらせませす。さういふところが、素人と
 玄人のちがひです」と、話すのを聞いたことがある。

五、劔の話

一

劔の長短は何れに利があるかといふ議論は可なり昔からあつたものと見えて、古書に左の如き
 記述がある。

「横田備中守申分、長き刀は大勢に渡り合て戦候へば、後には切先下りに成て、敵きれぬもの
 て御座候、美濃守申候如く、初心の間は盲打を仕、切先を打下け、多分土に切込むものにて御座
 候、數度手に合たる者と、合ざる者との替りは、爰にて御座候、土を切初心の者を、切剛たる者
 が切には造作も無き事にて候、平加成瀬と信虎公との御合戦の如く、日の内に度々の合戦に成て
 は、長き物は皆切先下りたる由に候、昔も義經、芳野山にて忠信に太刀を給はるに、寸延たるは

大勢に逢てはあしかるべしとて、二尺七寸の大刀をたまはりたりと承はり候、去ながら相手にむ
 かひ、又は二人三人をしとむる事は狭き場所にてさへこれ無く候は、腕に叶たらば長きにしく
 はこれ有るまじく候」

二

「小幡山城守申分、右之衆申候處、何れも尤にて候、先年小田原より、眞影流兵法者大和田源内
 と申す者参り、弟子數多取、指南仕り候、大和田申候は、一尺五寸の脇差と、三尺の刀と打合候
 に、相打に成と申候、つゞじが崎に切籠り候者これ有り候を、彼大和田行合て、一尺五六寸の脇
 差にて仕候、相手は三尺程の刀にて、ひき、家の内にて相打に仕候、相手寸延の刀故、戸に切込
 たる處を、何の手も無く仕留候、其後大和田、身延へ参詣仕候に、道にて殺害人に行合、刀は抜
 ず、脇差にて切合候、是も相手は三尺程の刀にて御座候、相手に仕、大和田腕を切られ候、大和田
 が脇差は相手の刀に當り申候、大和田切倒され候處に、もろ角豊後守参り向、相手を仕留申候、
 大和田、兵法は能もつかひ候へども、相手にあはぬ故、不穿鑿なることを申候、其ゆへは、三尺

の刀と、一尺五寸の脇差とは、一尺五寸おくれ候へ共、片手打に仕候故、三尺の刀と同寸になる也、手を添へて三尺になる道理なれば、三尺の刀と相打にしては、先の刀手に當ると云合點仕らず、算打、木とう打ちなどの如く、眞劍も少の請はづしにて、かちなりと心得候ては、すべて手にはぬ兵法者は心得ちがひ落度有べき様に存ぜられ候、大和田、初はつ、じが崎にては、狭き處なれば、脇差にて仕候事尤にて候、身延の途中にて、脇差を抜も不巧者なり、一度の利をいつも能事と思ふは僻事なるべし、北條早雲の歌に、いる道具いらぬ道具を思案していれども用ひいらずともて、と讀給ひしは尤の事也、美濃守申如く、刀にて働れぬ所の脇差也』

『山本勘助申分、何も申處尤至極にて候、塚原ト傳は、常に二尺四寸の刀をさし候へ共、仕合などの時、又は放打の者、其外覺悟仕たる時は、いつにても三尺程の刀を以て仕候由承及候、爰を以案じ候得ば、長刀のあつかはれぬ場所にては、短き物にて仕候道理と一つにて御座有るべく候』要するに、此の論は、廣い場所では、長刀を使うのが正法であつて、狭い場所などで、長刀を揮ふに不便である場合には、短刀を使へといふのに歸着するのであるから、吾々が今日考へても、道理ある言といはざるを得なからうと思はれる。

それにつけて憶ひ出すのは、故後藤象次郎氏と坂本龍馬との話である。二人とも人を斬つたのであるが、その場合が各異つて居るので、二人の直話が大に當時の人の興味を引いたさうである。

三

故後藤象次郎氏は、京都で或る公家を護衛して居つて、そのお公家を襲撃した浪士を斬つたのであるが、後藤氏はその後、屢、『刀は長いのに限る』と云つたといふのである。それは、戸外の廣場での闘ひであつたのだから、皆後藤氏の説に同じた。

坂本の場合はそれとは異つて居た。坂本は木屋町か何處かの宿で、新徴組の者四十人程に圍まれて、それを切抜けたのであるが、その時の闘ひは屋内で行はれたのである。坂本は後に斯う云つたと傳へられて居る。

『劍法などは、私の出會つたやう場合には全く用をなさぬと思ふ。廣場で小人數の者同士が、さア來い來れと正々堂々と相向ふ場合でもあつたら、長刀を振かざして、所謂劍法の秘術を揮ふ餘裕もあるのであらうが、天井の低い室内での亂闘では、私の用ゐたやうな少し長目な脇差で、

劍法も何もあつたもので無く、唯滅多矢鱈に横なぐりになぎまくるのが宜いやうだ』

四

その時の有様は、坂本自身の直話では次の様な風であつたといふのである。

坂本は新徴組の者が攻め寄せたと聞くや否や、長目の脇差を帶し、六連發の短銃を提げて階子の上に立ち現はれた。階下には新徴組の者どもが槍襖を作つて居たのだが、坂本が現はれたのを見るといふと、皆が唯ぞた／＼と押し合ひ始めた。貴様行け、われ行けと、てん／＼に他人を先頭に立たせよとうとする争であるらしかつた。

「なまなか多勢より、死を決した一人の方が、さういふ場合には強いものだ。寄せ手の方では、誰も最初に死に面するのは厭であつたと見えて、誰一人自ら進んで先登しようとするものは無くして、誰も彼も他人を先頭に立せよとする。それでその結果一番弱いものが先頭へ押し出されるやうになつたらしい」、斯う坂本は語つたと傳へられて居る。

やがて、敵は階子を上つて來た。坂本は短銃で一發喰はした。その敵は身を翻して落ちた。續

いて二番手が上つて來る。それも一發で落ちた。三番手が來る。これも打つ、落ちる、さういふ風で五人まで打つたのだが、皆落ちるには落ちたけれども丸が中つたやら、中たら無いやら、更に分らない。で、最後の一發だけは確に中たるやうにと、敵をできるだけ間近へ引き付けて、銃口を殆んどさし付ける程に思つて、引鐵を引いた。これも無論落ちた。

後で聞くと、その新徴組には負傷者は多勢あつたのだが、即死は一人のみであつたといふのだから、多分その死者は坂本の最後の弾に中つた者であつたのであらう。

五

「銃の音は平常試めした時には可なり大きい音だと思つたのだが、此の時には銃の音が如何にも小さかつた。もう少し大きい音のする銃であつたら宜かつたのと思ふのであつた。自分では落も着いて居た積りであつたのだが、實際は可なりあがつて居たことは、それでも知れるのだ」坂本は笑つてさう話したといふのだ。

そのうちに、敵は幾人も二階へ上つた來た。坂本は前に云つたやうな長い脇差を揮つて、それ

で亂打奮闘した。やがて寄せ手の引き間を見て、二階の窓から屋根へ出て、闇にまぎれて屋根つたひに逃れてしまったといふのである。

六

坂本龍馬は中岡慎太郎(實名石川清之助)と共に、慶應三年十一月十五日の夜、京都河原町の近江屋新助方の二階で、二人の刺客の爲めに殺されてしまった。

所で、その刺客は紀州の三浦安の黨であらうとか、近藤勇等であらうとかいふやうなさまざまの訛があつたのだが、確な事は分らずにしまつたのである。

所で、明治三十三年頃になつて、俺が坂本を斬つたのだといふ人が現はれて來た。その人は、その時分遠州金谷ヶ原とかに居た今井信郎といふ人であつた。その人は幕府旗下の士で京都へ行つて、新選組か何かに加はつて居たのであるが、坂本と中岡を斬つたのは、此の今井と桑名藩の渡邊吉太郎といふのと、京都の奥力の桂準之助といふのと、今一人とさう四人であつたといふのである。所で、渡邊も桂も鳥羽の戦争で戦死して、あとの一人の方は生きて居て、顯官になつて

居るから、當人のたつての頼みで、その名をいふことができ無いと、今井は云つて居るのであつた。

七

今井の直話だといふのは、次の如くである「十一月十五日の夜、先斗町で酒を飲んで、十時餘程過ぎに、才谷(坂本の變名)の旅宿の河原町蛸薬師油屋へ参り、私共は信州松代藩のこれ／＼といふものです、坂本さんに火急に御目にかゝりたいと申しました處、取次の者がはいと云つて立つて行きました……其中に取次が此方へと云ひますので後へついて二階へ参りました……見ますと二階は八疊と七疊の二間になつて居ました。六疊の方には書生が二人居て、八疊の方には坂本と中岡が机を中に挟んで坐つて居りました……私は初めての事ではあり、何れが坂本か少しも存じませず、外の三人も勿論知りませんので、早速機轉をきかして、やあ坂本さん暫らくと云ひますと、入口に坐つて居た方がどなたでしたねえと答へたのです。それと云ひさま手早く抜いて斬りつけました。最初髪を一つたゝいて置いて、體をすくめる拍子、横に左の腹を斬つ

て、それから踏み込んで、右から又一つ腹を斬りました、此二太刀で流石の坂本もうんと云つて休れて仕舞ひましたから、私はもういきついた事だと思ひましたが、後で聞きますと、明日の朝まで生きて居たさうです。それから中岡の方です。私共も中岡とは知らず、坂本さへ知らなかつたのですから無理はありません。坂本をやつてから、手早く脳天を三つほど續けて叩きましたから、そのまゝ倒れて仕舞ひました。御話しますれば長いのですが、此の間ほんとに電光石火で、一瞬間にやつて仕舞つたのです。然し、室へ這入ります前に、私の直ぐ後へ渡邊がついて参りましたが、それが腰の鞘を立て、梯子を上りましたので、六疊に居る書生が怪しいと見て、それと聲を掛けましたから、少し手順が狂つたのです。それで四人とも坂本の室へ這入り込む處でしたが、書生が聲をかけたため、渡邊と桂は早速に抜いて、六疊で書生と切合ひ、其間に私共は八疊の方でやつけたのです。書生は渡邊と桂に斬り立てられて、窓から屋根傳ひに逃げて仕舞ひました。其の夜は佐々木三郎の處で泊りまして、翌日市中の噂を聞くと、却々大變な騒ぎです、何でも皆是れは新選組の仕業だらう、多分は紀州の三浦久太郎(安)が新選組と合體してやつたのだらうと云ふ風評です。それに其の晩渡邊が六疊へ鞘を置いて歸つて來ましたが、その鞘が能く紀

州の士の差した高鞘に似て居りましたから、愈是れは三浦の仕業に違ひないと云ふ事でした。暫らくたつと果して土佐の若い者が三浦の家を襲ひました。すると、其の時丁度近藤(勇)が其處に居合せて、一所になつて追ひ歸しましたので、愈斬つたのは、三浦と近藤だと云ふ風説が高くなりました」

八

今井信郎の直話なるものは一見一寸事實かも知れぬと思はせるものであるに拘らず、坂本中岡が斬られたといふ報を得て最も早く駆け付けた谷干城氏の説に據ると、甚だ疑はしいところの多いものであるといふのである。

第一、實際の刺客の数は決して四人では無く、二人であつたといふのである。第二には、今井の話では、六疊に三人書生が居つたといふのだが、實際は、坂本、中岡の外には坂本の僕が一人居たのみであつたといふのである。第三には、書生の逃げ出たといふ窓の事が甚疑問だといふのである。第四には、坂本と中岡は机を中にして坐つて居たのでは無いといふのである。第五には

坂本及び中岡の傷の工合が今井の云ひ口とは何うも合ひ兼ねるといふのである。第六には、刺客は松代藩の者だと云つて來たのでは無く、十津川のものだと云つて來たといふのである。

九

谷氏の語つたところは、左の如くである。

「此坂本の斬られたと云ふ報知のあつた場合に、直ぐ駆け付けて行つた者が私と毛利恭助と云ふ者である……私が行つた時は最早疾うに後になつて居る。それで行つて見た所が、丁度階子の上り付けた所に坂本は斬り倒されて居る。夫からして、階子を上つて左に行き詰めた所が、即ち京都風の窓がある、御承知の通り、京都では町に向いた窓は大きな門を置いて其へ泥を塗つてある、なか／＼押しても突いても破れべきもので無い、其下に龍馬の僕が斬倒されて居る。そこで右手の方の坐敷には即ち中岡が斬られて居る、もう坂本は非常な大傷で、額の所を横に五寸程やられて居るから、此一刀で倒れねばならぬのであるが、後からやられて、背中に袈裟に行つて居る、坂本の傷はさう云ふ次第で、それからして、中岡の傷はどう云ふものかと云ふと、後から頭にか

けて後へ斬られ、それから又左右の手が斬られて居る、そして、足を兩方ともになぐられたものぢやから兩方斬られて居る。其内倒れたやつを又二太刀やつたものであるから、其後からやつた太刀と思ふのは殆ど骨に達する程深く行つて居るけれども、腦に達するものであるからして、なかなか元氣な石川でありますから、氣分は至つて慥である」

十

「そこでまあ一體どう云ふ始末であつたかと聞いて見ると……阪本の所へ來て二人が話して居る中に、十津川の者でござる、どうぞ御目に掛りたいと云うて來た、そこで取次の僕(阪本の僕)が手札を持つて上つて來る、中岡は手前に居つて、坂本は丁度床を後にして、前に居つた。それで二人で行燈へ頭を出して、其受取つた名札を見る、讀む暇はありませぬ。見居る所へ、僕が上つて來るに付いてすつと上がつて來た、そして置いて、矢庭にコナクソと云つて斬つた。それで手前に居つたのが中岡である——行つて見ると位置も違ひ、机などを列べて居つたといふけれども、そんな譯でなかつた、矢庭に二人が名札を見やうとする所へ斬込んで來た——中岡を先きに

やつた其言葉は所謂「コナクソ」の一聲、そして斬られた。その時はつと思ふた時に、阪本は後の所に刀があるから、向いて刀を取らうとする様だけは覚えて居る、自分も直ぐに短刀を取つたけれども、奈何せん、それを取つたなりで抜くことは出来ぬから、振廻し、向ふは後へ退りくなくられた、そこでもう手はきかぬ様になつたから、唯向ふに武者振り附かうとすると、兩足をなぐられて仕舞つた、それで足が立たぬやうになつて、仕方がないから、其儘に倒れて、斬らせて置くより仕様が無い、其儘倒れて居つた、さうすると、もう宜いもう宜いと云うて出て行つた、一賊の云ふた言葉は、コナクソといふ言葉と、もう宜いといふ言葉の外聞きはしない——そこで阪本はどうしたであらうか、どうも分らない、分らないが阪本も素より斬られた、今の中間が斬られて倒れて暫らくして居る中に、阪本が倒れて居たが、すつと起上つて、行燈を提げて、階子段の傍まで行つた、そして其處で倒れて、石川刀は無いか、刀は無いかと二聲三聲言うて、それでもう音が無い様になつた、斬られて居つた所は八疊の間であつたけれども、兎もあれ、立ち上つた儘、階子段の傍まで行燈を持つて行つて倒れたといふのが、是が即ち石川の話」

十一

「それで石川の云ふに、なか／＼實にどうも鋭いやり方で、自分等も随分從來油断はせぬが、何うする間もなつた、コナクソといふ一聲でやられた、斯う云ふ話であつた。」

「それからして、今の傷から云ひましても、此人(今井を云ふ)の言ふ所に依ると、先づ其横鬘を一つた、いた、是は何が話にでも聞いたものではないか、此額をやられたのは五寸ぐらいやられた、それから稍々似て居るが、横腹を斬つた、又踏み込んで兩腹を斬つたといふのだが、それが深い傷といふのは、横に眉の上をやられて居る、それから後から袈裟にやられた、此二つが先づ致命傷、そこで阪本は何ういふことをしたかと云ふと、何うも分らぬけれども、是も想像が出来、自分は刀を確に取つたに相違無い、刀を取つたが、もう抜く間も無いから、鞘越しで受けた。それで後から袈裟にやられて、又重ねて斬つて来たから、受けたか、太刀折の所が六寸程鞘越しに切られて居る、身は三寸程刃が削れて、鉛を切つたやうに削れて居る、それは受ひたか受流したやうな理窟になつて、そして、其時横になぐられたのが額の傷であらうと想像される、傷のと

ころから云ふても、此人の言うて居る所とは全く違ふ』

十二

「是は何者の所業であらう、誰にやられたかといふことに付ては、未だ今に心に掛けて詮議中である、石川の判断では、これは何うしても人を故々切つて居る新選組の者だらう。それでコナクツ(こん畜生の意味)といふ言葉に就て判断した石川の云ふに、どうも四國人であらう。コナクツといふことは四國人が能う云ふが、土佐の者では無からう、土佐の者は其時分石川を斬る者は無い、皆殆ど有志は一致合體して居る時であつた。そこで一つの證據が残つて居るのは、刀の鞘がある……コナクツと云ふ言葉とも宜いと云ふ言葉の外に賊の残して行つたものは刀の鞘だけである。それで石川は誠に遺憾千萬である、甚だ不覺を取つた、片時もやらなければ皆有志の徒がやられるから、速く事を擧げいといふことを頻りに云ふた、そこで石川は今申す通り十六日の午後の一時か二時頃昔で云ふと八つ時ぐらゐるとうく死んだが、其死なぬ前に傍に居たのは、即ち今の宮内大臣田中光顯、是も土佐の白川屋敷に圍つてあつた浪人組で、即ち自分の大將がさ

ういふ災難に遭つたものであるから、田中が取敢ずやつて來た、それから田中が石川を慰める、是は貴様の傷は餘程浅い、井上を見よ、聞多はあの通り酷い傷だが、癒つた、貴様は十分に癒るぞと云ふて、力を附けた、併しながら、後から斬つたのが腦へ幾分か掛つたものと見えて、次第に嘔氣を催し、吐出して、とうく翌日の八つ前ぐらゐりに斃れた』

十三

「石川が斬られたのはその通り十五日であるが、それより前に新選組に元居つて意見が分れて、高臺寺といふ寺へ行つて居つたものが十四五人あつた、伊東甲子太郎といふのが頭であつたが、その甲子太郎が十八日の夜新選組の者に殺された、新選組の者は、甲子太郎を殺して置て、さア伊東が災難に遭つたから片時も早く參れと云つてやつた、高臺寺組の居合せた者が七八人程皆行つたが、待ち伏せて居た新選組の爲め皆殺されてしまつた、所が、その晩は伏見の方へ行つて居て高臺寺に居合せなかつた者が二三人あつた、それだけが斬り残された譯である、それで、其の斬り残されの者どもは初め白川の土佐屋敷へ來た、白川の土佐屋敷はあの時分は野原であつて浪

人が大變居るが、危険であるから、もう不用心故、薩摩の屋敷の方へ頼んだところが、こゝも危いと云ふので、伏見の薩摩屋敷へ圍つて居つた、其處で、此の斬り残され者等は元々新選組に遣入つて居つたものであるからして、刀に見覺があらうと云ふので、私は毛利とそれから彼の薩摩の中村半次郎と三人で、伏見の薩摩屋敷へ行つて、彼の甲子太郎の類の者に會つて、其の刀の鞘を見せた」

十四

「さうすると、此の二三人が評議して見て、是は原田佐之助の刀と思ふ……と言ひだした、……成る程原田佐之助といふのは、腕前の男だ、新選組の中で先づ實行委員と云ふ理窟で、人を斬りに行くには何時でも先に立つて行く、そこで私などが、はア成る程何うも其舉動と云ひ、如何にも武邊場敷の者であらう。何しろ敏捷なやり方である。何うしてもそれに相違無いと云ふので、最早一人は原田佐之助、其の他斬つた者は新選組の者に相違ないといふことにまあ決定して居る」

「それでまあ全體さういふな有様で、此の時のことは、私等の國の者等の考へも、元紀州の光明丸といろは丸と衝突の時に、坂本等が非常な激烈な談判をして償金を取つたから、其恨に紀州人が新選組を遣はしてやつたであらう、そこで紀州の巨魁は今の三浦安——三浦久太郎に相違ないから、即ち新選組を煽動して斬らせたであらうといふところからして、誠に詰らぬ壯士等が三浦安の所へ斬り込んだ所、向ふがドッコイさうはいかぬといふので、新選組に言つてやつて準備をして居つたから、此方から行つたのがやられた」

一五

「それで斬つた(坂本を)といふ今井は、松代藩の者であると言つて行つたと云ふが、松代藩の者だなどと云ふても、ウツカリ會ひはせぬ、皆用心して居る、殊に坂本は才谷梅太郎と云つて名を變へて居つて、殊に新選組から狙はるゝので、薩摩の方からも、危いに依つて何うだ私の方に參るやうにと云うたが、屋敷の中へ這入ると、出入りに窮屈だから這入らうと云はない、それ故に平生警戒を加へて居るから、松代藩など云うて來ても會ひはせぬのであります、十津川の者は

始終出入りして居りました、勤王論者が十津川には多かつた、それで十津川と云うて来たから取次も安心して取次した、そこで、十津川と云うことをかたられたといふので、十津川人が大變怒つて、即ち、三浦久太郎を斬りに行つた場合にも、十津川人が出掛けて行つた、十津川の中井承五郎といふは大分人を斬つた様子ぢやが……とうく斬られて仕舞つた、』

十六

今日になつては、今井信郎といふ人は坂本の刺客では無かつたのだと断定するだけの材料は僕等には有る譯は無いのだが、谷氏の話『谷干城遺稿』所載に比較すると今井の話の方は少し胡亂なところがあるやうにも思はれる。

谷氏が中岡から親しく聞いたといふ話の方が、何うも辻褄があつて居るやうに思はれるのに反して、今井の方の話は餘程粗雑なやうである。阪本、中岡兩人を本當に斬つたのであつたら、それは今井といふ人の生涯での大きな事件の一つに相違なかつであらう、さうすれば、さういふ大事件ならば、彼はもう少し精細に記憶し、もう少し詳密に語るべきであらう、谷氏が見た、實地

の有様と何處かで動かし難き符合點を持つことになるべきであらうと思はれる、谷氏は今井の直話なるものをば可なり手酷しく批評して居る、殆ど今井は阪本等の斬られた時の状況を誰か、ら聞いて、それを旨く緩ぢ合せて斬つた者は自分等だと誇稱して居るのだと断定するやうな言葉をば、談話の諸所で洩して居る。谷氏は終りに臨んで『何れにしても、今井が斬つたといふ事は此の證據の上では認められぬと思ふ』と云つ居る。

偏頗の無いところ、今井信郎なる人の云ふところは、全く谷氏の云つて居る如く、俄に信ずることでき無いやうな氣がする。然し何れにしても此れ等の事は今はもう夢の如きものとなつた。

然しながら、幕末の有司は、所謂る反政府の浪士等をば、個人的にも敵視し、憎悪して居たやうであるが、今の當局者は、所謂る危険人物等をば、同じやうに敵視し憎悪して居るのであらうか。

或は、昔の人は割合に正直であり得るのに便利であつたかも知れぬ。

筆蹟の相似

一

文壇の人々の中で、筆蹟の似通つて居る人々が可なりある。僕の知つて居る人々の中で云つても、小宮譽隆君の字が故夏目漱石氏の字に酷似し、大杉榮君の字が堺利彦君の字に似て居り、伊藤野枝君の字が平塚明子君の字に似て居り、與謝野晶子君の字が與謝野寛君の字に似て居る。

小宮君は萬事漱石君の寫しである。が、外の點は知らず、字の似て居るのは、小宮君にさういふ意識がある結果であらうと思ふ。他の三君の字がそれ／＼親しい先輩の字に似て居るのはそれ程意識して似せて居るのではあるまいと思ふ。

或る若い人が「世間では、與謝野寛君の字は令閨晶子君の筆蹟を學んで書くのだなど、いふので、與謝野君は不平であるらしい」と、いふやうなことを僕に話した。

與謝野君の字は、晶子君の書が今日の如く世上で持て囃されるやうになら無い時分から、今のやうな筆法のものであつた。僕が與謝野君を知つてからも十四五年にはなるのだが、與謝野君の字は大體に於て變化は無い。晶子君の方が、寛君からの感化で、その字が寛君の筆法に大部似て居るのである。寛君の書が無論晶子君の書よりも數等上だ。

大杉君の書が堺君の書に似て居ることに就ては、先き頃大杉君その人と話したことがある。

大杉君は自分の書が堺君の字に似て居ることを承認して居た。で、斯う云つた——「それは自分でも知つて居ます。寄せ書などをする時に何うかするとまるで同じやうな字が出来て、皆が不思議がることがある位です」

大杉君は又、「僕の字が堺の字に似て居ることは事實であつて、僕がわざ／＼堺の字を真似て居るのだと云はれたところで僕はそれは厭だと思ひません。反つて、僕に取つてはそれが光榮かも知れませんが、然し、實際は斯ういふ事實があるんです」と云つて、次のやうな話をした。

大杉君が始めて家を持つた時に、その門札を堺君に書いて貰つて、それを出して置いた。所が或る日、思ひも掛けず、昔の同窓がたづねて來た。何うして此處に住つて居ることが分つたのだ

ときくと、その客は、その邊は度々通るので、その門札に氣が付いたが、世には同名異人があるのだから、滅多に尋ねても何うかと思つて、何時も素通りをしたのであつたが、幾度見ても字が大杉君の字に相違無いので、到頭意を決してたづねて來たと云ふのであつた。

「その友人は、僕が堺と友人になら無い前の友人であつて、僕が堺を知つてからはその友人には逢は無かつたのですから、此の友人は僕の昔の字より外知ら無い譯なんです。さうして見ると、僕の字は先天的に堺の字に似て居るといふことになりませんか」と、云つて、大杉君は微笑つたことがある。

二

以上の話とは少し違つたことであるかも知れぬが、僕は此頃一寸面白い物を見た。

大阪で發行する『海南』といふ雑誌があつて、僕もその寄贈を受けて居る。所で、その雑誌の十一月十七日發行第六號の第八頁を見ると、田中伯爵所藏なる由の武市瑞山獄中戯畫なるもの、寫眞版が一つ出て居る。繪は牛若が熊坂長範を斬り倒したところを畫いたものであつて、紙の右上

の隅へ寄せて、『橘次伴牛若丸而宿於香我美驛、有賊侵橘次之財、牛若舞劍擊之、當此時牛若歳已十有七』と書いてある。小さい寫眞版のことであるのだから、繪の方は確なことは云へ無いのだが、字の方は何う見ても僕の祖父馬場源馬の書であると思ふ。繪の方も大分祖父の筆意に似て居るやうな氣がする。のみならず、此の寫眞版と同じ繪を僕の祖父の畫稿の中で見たやうに思つたので、祖父の遺物の中を探したけれどもそれは見當ら無かつた。

祖父は繪も素人繪としては漫畫がなか／＼巧であつた。書も極めて雄渾な字をものした。晩年は、筆を餘程横にして書いたらしい。瑞山戯畫と註されて居るその問題の繪の中の字は、祖父のさういふ老筆に酷似して居る。いや、僕の見るところでは、全くそれである。

武市瑞山は幕末の志士武市半平太のことである。僕の祖父は、半平太より一時代前の人間である。書畫が相似て居るところで、僕の祖父が瑞山の筆蹟を學んだのでは無くして、瑞山の方が僕の祖父の筆蹟を學んだといふ方が、自然の推測であるやうに思はれる。

高知藩に於て何時も政權に近い位地に居たのは食祿四五百石以上の所謂上士であつた。それ以下の下平士及び準士たる者などは、上士の專横に對しては皆不平を抱いて居た。所で、僕の祖父源

馬は彼の時代に於けるさういふ平士の代表的人物の一人であつた。性は極めて硬直、思想は極めて自由であり、藩の財政、軍制、國防、風紀等に關する當路への建白は四五十回であつたであらう、その草稿の今僕の家に残つて居るだけでも廿通位はある。之に加ふるに、手先は如何にも器用であつた。甲冑を鍛ひ、縁、頭、鐔等の刀劍附屬物の鍛冶、象笏も、素人としては確に秀で居た。尙その上に、彼は極めて雄辯であつた。

瑞山の家も矢張り平士の列にあつたのであらうと思ふ。さすれば、瑞山の如きも僕の祖父を尊敬して居て、その書畫などに於ても僕の祖父の感化をば直接若くは間接に受けたのではあるまいか。

以上の推測は此問題の畫を瑞山の眞蹟として見た上でのことである。けれども、僕は、瑞山の作として傳へられて居る此書畫が何うかすると僕の祖父の作ではあるまいかと思ふのだ。何うと云ふことで、僕の祖父の作物が瑞山の作だと傳つてそれが田中伯の手へ入つたのでは無からうかと思ふのである。

此瑞山の書畫として傳へらるゝものは、田中伯が珍重せられて居るものであらうから、その原

物をも見ずに、以上の如き疑ひを入れるのは、草率非禮の感無きにしてもあらずであるが、彼の書畫が瑞山の作で無いことになつても、馬場辰猪、同孤蝶の祖父であつて、高知藩に於ける維新志士の先驅をなした馬場源馬氏高の眞蹟であるといふことになれば、滿更價値の無いものでは無からう。

が、此は此方で申し上げることである。焉んぞ知らん、先方様では人もあらうに辰猪、孤蝶などの祖父の作などは眞つ平御免だと仰せられまいものでもあるまい。

ともあれ、聞き度きは、此の問題の繪が田中伯の手へ入つた由來である。

逝ける板垣伯

一

吾々の少年時代には、東洋自由の泰斗など、歌はれた板垣伯も遂に逝いた。高齡のことではあり、さう永く生きて居られやうとは思つて居無かつたが、いよく斯うなつて見ると、今更に自分も早や老人の部に入りつゝあることを、急に明に感ぜざるを得無い。

僕は伯と口をきいたことは唯つた一遍しきや無い。

それは多分明治二十六年の春であつたかと思ふ。その時僕は高知の共立學校といふ英語學校の教師に雇はれて行つて居た。所が、板垣伯が歸省されたので、全市が盛な歓迎をした。

市の外れの遊廓の中にある得月樓といふ大きい料理屋で板垣伯歓迎の宴會が催されたが、その時學校からの希望で僕も伯を歓迎する演説者の一人になつた。で、その時、伯と數語をまじへた

ことがある。

二

伯の家は、その祖先は甲州から出たのであらうかと思はれる。山内家の藩臣には遠州附きと、土州で仕へたものと二種類あるのだが、板垣家は僕等の家よりはすつと祿高が多かつたやうに聞いて居るのだから、多分遠州附きであつたのだらうと思ふ。

退助氏の父か祖父かの何某氏も可なり氣骨のあつた人だといふのだが、その人のことで次のやうな話を聞いたことがある。

板垣家の隣には、大身の何がしの邸があつたが、その邸で或る時二階を新築した。そして、少時すると、その邸から板垣家へ、『手前どもの二階からは、貴家のお庭の松が何うも目障りになるが、伐つては頂けまいか』と云ひ込んで來た。

板垣家の主人は『畏まりました』と云つて、直ぐ松を伐つて置いて、少し経つと隣へ使ひをやつた——『手前どもの座敷から見ますと、貴家の二階が何うも目障りである。何うぞお破しくださ

51

隣邸では大いに狼狽してひたあやまりにあやまつこといふのである。

三

土佐には竹内流の體術といふのがある。これは所謂組討の術で、専ら短刀の扱ひを教へるものである。昔は竹藪を着け、小太刀に擬した短い竹刀か木劍かを帶へ指して、試合をやつたやうに聞いて居る。

『武術流祖録』には、作州津山の城下波賀村の人竹内中務大輔久盛といふ人が天文年中創始した武術だとある。久盛は『小具足の達人也、今竹内流腰廻りといふ。其末流諸州に在り』とあるのだが、何うも近代では土州以外に行はれて居たことを餘り聞かぬやうである。

一體土州へは新しい武術の入ることが遅く、上國では下段の劍術が盛に行はれて居た天保頃でさへ、土佐ではまだ無外流の如き舊式の上段の劍術が行はれた位なのだから、竹内流の體術もさういふ風で、土佐にばかり残つたのかも知れぬのだ。

板垣伯も壯年時に竹内流の體術を學んだのであるが、それが役に立つて、岐阜で相原某に刺された時に、淺傷で濟んだといふのである。伯は遭難後竹内流の師匠——本山氏であつたと記憶する——へ手紙を與へて、昔の指南の思に對し感謝の意を表したと傳へられて居る。

相原の公判廷での陳述中には、『板垣はよく／＼狼狽したと見えて、刃を握つた』といふ言葉がある。

所が、竹内流には敵の刃を握り止める手があるのだ。板垣伯はその手によつて、相原の短刀を握り止めたのだ。本山氏に與へた手紙にはその點が云つてあつたらうと思はれる。

因にいふ、出獄後相原は、船に乗つて、西へ向ふ途中、遠州灘あたりで、行方が分ら無くなつたやうに聞いて居る。板垣伯に對する相原の刺客的行爲は何人かの煽動使曠に因るものであつて、その使曠者を取つては、相原が自由の身になつて生きて居るのは、甚だ困ることであつた。それが、相原が行方不明になつた原因なのだと云ふ人もある。けれども、これは單に想像説かも知れぬ。

清夜雜記

一

自分の書いた一篇の作物の隅から隅までを残らず他人の解らせようとするのは、無効な勞に屬する。自分の書いたものを有らゆる他人に解らせようとするのは全く不可能事を企つるものと云はなければならぬ。

他人と自分とは、多くの場合、年齢が進ひ、境遇が進ひ、従つて經驗が進ひ、學問の方向が進ひ、お負に、作者たる自分がその作を書いた時とは違つた心理状態の下に於て他人はその作を讀むのである。

その作物が細かな感情、特殊な境遇の下に書かれたものであればある程、他人に十分に理解されるチャンスは益少くなる譯である。

生方敏郎君の『人のアラ世間のアラ』といふ文集を見ると、その中に『今日最も忠實な讀者は、作者自身である』といふ語がある。これは單獨なものとして見れば諷刺の意味にも取れるであらうが、その前後の文勢から推すと、僕の前言の如き意味を云つたものと解し得られると思ふ。

他人が自分のものを善く讀んで呉れ無いと思ふと、不平が出るかも知れぬが、實は自分が他人のものを讀むのも左程親切では無いのだから、これはお互つこと云はざるを得無いのだ。

もう四五年前のことであるが、夏目漱石君と話して居るうちに、夏目君が、

『他人の物は自分の物のやうに親切には何うしても讀め無いものだ』

と、いふ意味のことを云つた。僕はその時次のやうに云つたことを記憶して居る――

『僕もさう思ひます。僕は誤植が甚く氣になるのだが、僕の物に誤植が何時も多いやうに思ひます。けれども、これは僕の物に限り誤植が多いのでは無くして、他人の物を僕が讀む場合には、可なり甚い誤植があつても僕がそれに氣が付かないためであらうと思ひます。そうして見ると、他人の物は随分好い加減に不親切に讀んで居るのだといふことが分ります』

作者の人となりを知つて居るといふことがその作物を讀む助けになることはいふまでも無いこ

ものである。それで、随分親しい人々の書いたものならば、その心持が可なり善く解るべき筈であるのだが、それでも、時々作者自身に質問して見た上でなければ一寸何とも判断の出来ないやうなことがある。其處で、作者自身にぶつかつて、此方の疑義を質して見ると、何も彼も全く氷釋して、それまでの自分の理解力の足り無かつたこと、讀み方の餘り親切で無かつたことが明かに分ることなどは、屢あることなのだ。夏目君もさういふ點では、僕と同じ考へであつたと思ふ。要するに、技巧の細かい、感情の緻密な作物が廣く他人に解されるものだとは思ふべきでは無い。若し、他人に訴へる積りで書くものにしても、精々のところ、自分を個人的に知つて居り、且理解して居て呉れる僅少の人々にのみ訴へる積り位なところで書くべきものである。

島崎藤村君が、或る雑誌から愛讀書を問はれて、『自分は親しい人々の書いたものを讀むのが好きだ』といふ意味で答へたことがある。

全くその通りである。自分に親しい人々の作物を讀む場合には、成る程彼の男ならば、斯ういふことに對しては斯う考へ方をする筈だとか、斯ういふ觀方をする筈だとか、斯ういふ點から筆を着けて行く筈だとかいふやうな此方の期待に符つて居るところが興味の深い點である。

三

或は又、さういふ期待が外れる點があつたところで、それに依つて、可なり善くその作家の人となりを知つて居る積りの自分にもその人の性情その他で意外な見落しが自分の方にあつたことに氣が付いて、其處で又盡きざる興味が喚び起される。

漫然として聞けば、人々の言葉が同じなやうに見えるのであるが、仔細にこれを聞けば、言葉は人に依つて千差万別である。人各その言葉に特徴がある。同じ事をば同じ言葉で、同じ言ひ廻しでいふことは殆ど無いと云つて宜からう。さういふ各人の言葉の反映がその人々の作物のなかで窺ひ得られる。

その人々のさういふ言葉を書いた時の姿勢さへも思ひ浮べられるやうなことがある。さういふ時のその人々の顔付さへ眼前に髣髴とするやうな氣のすることがある。又、その人々がさういふ言葉を口で云つたものだと思像するといふと、その口付、その聲の調子さへも思へ浮べられることがある。

殊に、まだ名を成さ無かつた時分からその人を知つては居ながら、その人の作物を讀む機会が無かつたのが、ふとその作物を手にしてその人の驚くべき進境を知るのなどは、甚だ快いものである。

今は最早世に亡き友等の著書を讀む時、さまざまの追懐の、さまざまの感慨の、胸に滿つることは、誰しも覺えあることであらう。

希はくは、我等にらん後、彼の男で無くば何うしても斯うは書かぬ、この邊は彼の男をば眼のあたり見るやうだと、親しき人々が云つて呉れるやうな文字をば僅に數行でも宜いから、遺し度いものである。

四

生方君の『人のアラ世間のアラ』の中には又左の如き語がある――

『印刷せられた自分の文章は自分の思想の反映である。私は美人が自分の顔の美しさを鏡に映して誇るやうに、印刷せられた自分の思想を幾度もく眺めて楽しむ』

生方君程熱烈な愛情をば僕は自分の作物に對しては持つて居無いやうであるが、それでも、自分の書いたものが載つて居る雑誌などが來れば、先づ自分のものが印刷された上で出來榮は何うであらうかと思つて、自分のものをば眞先に讀んでみる。

所が、面白いことには、原稿の時に可なりな出來だと思つて居たものは、印刷された上で見ると、必ず元の孝へとは違つて、何うも拙いものやうな氣がする。それとは反對に、原稿の時に意に滿た無かつたものや方は、印刷された上で見ると、大抵滿更でも無いといふ氣がする。長詩とか、短文とかいふやうなものや時は、殊にさうである。

けれども、さういふ感じの強かつたのは昔のことであつて、今はさういふ感じが餘程薄くなつて來た。それだけ確に年を取つたのであらうと思ふ。

自分の何年も前に書いたものを讀んで見ることは面白いものである。廿年も前に書いたものなどに對すると、まるで他人のものを讀む時と同じやうな感興を覺へることがある。時にはとても今斯うは書け無いと思ふことさへある。

會て島崎君が僕の書いたものの中の一句をば同君の『並木』の中か何かに引いたことがあるが、

その『並木』がまだ脱稿し無いうちに、島崎君は、斯ういふ語を引用する積りだと云つて、僕のその語を僕に告げた。すると、僕は、『一體それは誰の語なんだね』と問うた。島崎君は『君の『流水日記』の中の語ぢやアないか』と云ふ、僕は『さうかなア、そんな旨いことを僕が書いたか知ら』と答へて、大笑ひになつたことがある。

五

レオナルトオ・ダ・ヴィンチの語に、

『鏡を以て自己の作を寫し、以て之を判断せよ、是自己の作をば反對の方向より見るものなるが故に、や、他人の作を見るの觀あればなり。製作中と雖も、屢筆を捨て、判断をなすを要す、熱中甚しければ反つて過ち多し』
といふのがある。

自分の作物に關する判断を誤らせるやうな感情は、その製作の當時に於ての方がより多く存在するのは事實であるが、何年も前に書いた自分のものに對する場合であつても、前の場合と同じ

感情はもう無くなつて居るとしても、その判断を誤らせるやうな他の種類の感情はあるべき筈である。

けれども、年経た後であるとすれば、その作物をば客観することがより容易であるべきであるのだから、大體から云へば、さういふ作物に對しては判断を誤ら無いものだと思ふ。

『人のアラ世間のアラ』の中で生方君は若し百萬金を得たら何うするといふ想像を書いて居る。『私は夢の覺め無い中に、先づその百萬金を使ふことにする。私は先づ原稿を書くのを止めて、早速睡る。私は此のまゝ、永久に睡つてしまひ度い位休息を欲して居る。少しも生活の心配無く、深いく、那落の底へ落ちるやうに止まるところなく眠り度い』

此度に引いた此語だけは、諷刺とは考へられ無い。

諷刺で無いとすれば、これには同感である。實際睡り度い。何の用も持た無い身になつて、電車の音も何もし無いやうな所で、十分に眠り度い。

さういふ風に眠り度いと思ふのは、僕に取つては、少くとも廿五年來の志望である。僕は昔から眠り度かつた。けれども、その時分には眠つてはいけななのだといふ感があつた。それで、

なるべく眠ら無いやうにしたのであつた。今まで自分のした事を回顧すると、まるで、眠い眼をこすりこすり無理に眠ら無いやうにしてした事ばかりなやうな気がする。その故であらう、今まで何一つロクな事はして居無いのだ。

今でも、矢張り眠つてしまつては悪いといふ氣はするにはするが、今は眠られるのなら、義務は兎に角、無理にも眠り度いといふ心持は大分強くなつて來た。

六

二月や三月の間眠る位なことならば、何うにかなりさうであるのだが、眼が覺めた後で何うするかといふ心配があるのでは、眠つたところで何程の足しにもなりさうで無い。

さういふ心配無しに眠ることのできる基礎には少くともなりさうな機會が僕の部屋を通り抜けたことが一二度はあつたやうな氣もするのであるが、その機會の所謂前額の髪にかじり付いて何處までも隨いて行かうといふ執着心も無く、又或る時などは前額の髪を捉へるだけの決斷冒險の勇氣を缺いて居たので、その機會をば永久に逸してしまつたのだと思ふ。

今は最早眠り得られさうな機會は來まいと思ふのだから、今此所で、眠り得られた後は何うなるかといふことを思ふのなどは、全く夢の夢に屬することである。

けれども、何うせ眠い眼をこすりこすり書くものであるのだから、全くの夢を語るのもまるく縁の無いことではあるまい。

曾て或る席で——永井荷風君もその席に居られたやうに思ふのだが——或る人が僕に、『君等は金が出来たら嘘書が無いことだらうなア』と云つた。僕は言下に斯う答へた。『當分は惰けるだらうが、そのうち、又書き出すに違ひ無い、何にもせず居るといふのは、餘程傑い人で、も無くばやれ無いことである。金が無い時は生活の爲めに書くのだが、金が出来れば今までは違つた意味で書くやうになるのだらうと思ふ。兎に角、何かせずには居られ無いのが、人間の天性であるのだから、何かしやうとするに違ひ無い。所で、吾々は物でも書くよ外には何もできることは無いのだから、矢張り元々通りのことをやりだすに極まつて居る』

『金の無いうちは何んな拙いものを書いて、世間は勘辨して呉れるのだが、金が出来てからも矢張り拙いものを書いて居たら、世間では、最早慶せば宜いにと、嘘ど顔を擧める人があること

であらう。希はくは、可なりに金ができて、うんと拙いものを自費出版か何かして、他人にさんざん顔を撃めさせ度いものではないか』

今も尙時々そんなことを思ふことはある。金といふものは、それを備けたら、廣告の爲めたる、罪滅ほしの爲めたるを問はず、鬼に角その九牛の一毛にても、慈善事業とか、公共事業とかいふものに寄附するといふやうな心掛の好い人々に、天が下し給ふものであるらしく思はれる。

吾々の如き下らぬ使ひ路をば金を備け無い先から考へて居るやうな不届な者には、天は常久に金は授け給はざること、思ふ。天の配劑も亦妙なるかなとでも申し上げて置かうか。

おでんの鍋

上

先日、或るところで、『今の人間には美しいものを愛する考をもつと持たせるやうにしなければいけない。東京の人間がもつと奇麗なものを愛する心が強かつたら、道路でも、電車でも家屋でも直きにずつと奇麗になつてしまふ』といふやうな話を或る人がした。

成る程一寸と聞くと、もつともなことのやうに思へるのだが、しかし、實際は必らずしもさうでは無い。

今日の世の中の支配者は金持ち連であつて、貧乏な吾々には何の力も無い。成る程、國政なり市政に参加する権利が形式だけでは吾々にもあるやうだが、吾々の代表者なる者も結局のところは、金持ち連のご機嫌をひどくそこねるやうなことはする氣遣ひはないし、又、そんなことをす

る力も無いのだ。

ところで、道路の混雑がひどくつて困まるのは、徒歩することのある貧乏人である。電車のきたないのや、込み合ふのや、雨もりのするので、閉口するのは、電車に度々乗る貧乏人である。家屋のガタ／＼普請で弱らされて居るのは、さういふ家に住んで、眼の飛び抜ける程高い家賃を拂はせられて居るこれ又貧乏人である。

しかし、さういふ貧乏人は、そんな不平を持ちだしたところで、何の効も無いし、餘り強くそれを云ひだすと、何處か、率先きを振る者は兇徒囂業罪位を以つて殺せられるし、そんな者に附随して行つたものどもは兇徒なみの取り扱ひを受け兼ねることになる。これでは誰だつても、陰ではさん／＼こぼして居ようとも、公だつた運動を起す氣遣ひは何うしたつてありはしない。

そんなら金持ち連は何うかといふと、さういふ人々は、道路の悪いことも、電車のいけないことも、家屋のひどいことも知つては居るかも知れぬが、さういふ連中は町を徒歩せられることはめつたに無い。電車にお召しになることなどは絶無であらう。大抵がた／＼普請のこわれか

かつた家など除ちつとも見え無いやうな所謂空氣のいゝ、廣々とした邸宅にお住ひである。

自動車ばかりで出入せられる、きれいな、見晴しのいゝ大邸宅に住まつて居られるそれ等の人が、道路のぬかることゝか、電車のひどいことゝか、家屋の燦少にしてきたないことなどを、さう深く氣にせらるべき理由が何處にあるのであらう。

少しは見た目に心持が悪るいかも知れぬし、もう少し奇麗には出来ぬものか位なことは云ふ人がたまにはあるかも知れぬが、ご自分たちとは直接交渉のちつとも無いことなのだから、隣りの洗濯屋の汚い干し物ほどには、氣になさるんでも済むことである。

何うも、権力者たる金持ち諸君の方から、重に吾々貧乏人のためになる諸種の改良をしてくださらうなど、は、吾々の方での餘り蟲のよすぎる期待のやうである。

先づ、さういふ風で、権力者の方から、吾々の爲めに、奇麗なものを與へて貰らう望みは無ささうだし、吾々の方ではみづからさういふものを得る力が無いものとすれば、吾々の方で幾ら奇麗なものが好きになつたところで、世間の有りさまは何程もかわら無いものと見なければならぬ。

尙その上に、世の中に於て最も多數の貧乏人に取つては、奇麗なものどころか、きたないものでさへ満足には得られ無くつて困つて居る最中である。さういふ多數の貧乏人に取つては奇麗な物に對する欲望を持つに至るには、まだ一階段あるのだ。

さういふ欲望を貧乏人どもに持たせるのをば金持ち諸君が自分たちの利益だと思つて居られるか何うだか、それは今のところ少くとも疑問であらう。

要するに、一般に云つて、奇麗なものを好く心を人に起させるのは、決して悪いことでは無い。さういふ必要はたしかにあるには違ひ無い。けれども、世の中の物を奇麗にするには唯だそれだけでは、駄目である。

中

金持ちの話が出てみると、ちよいと此の頃讀んだ或る探偵小説を思ひ出す。それは、或る金持ちが、年をとつて居ても、いろ／＼な企業的冒險心が盛であつたが爲めに、放浪者の間に大勢力を持つて居て『放浪者の女王』と紳名されて居る美しい女を使つて、放浪者の間に大罪惡團を起

さうといふ計畫を立てる。すると、その女はさういふ罪惡團を組織する氣は無かつたが、その金持ちの老人をだまして、金を引きだしてやらうとか、つた。けれども、老人がその手にはなかなか乗らぬので、遂に老人を捕虜のやうにして、放浪の旅へ出る。老人は金も取り上げられ、衣服も汚い衣服を着せられて、貨車へ乗せられたり、下等室へ乗せられたりして、長い旅を続ける。作者は其所で面白いことを云つて居る。

昔、或る王様が『王といふ威嚴は身體に着いて居るものだから、王は何んな服装をして居ても直ぐに分かる。例へば、俺が乞食の姿をして外へ出ても、人民はきつと俺を認める。何んなら、百金程の賭をいかうか』と、朝臣の一人に云つた。

ところが、その朝臣は金には困つて居たが、負ける氣遣ひは無いと思つたので、その賭を承諾した。

其所で、王様は早速乞食の服装になつて、街を歩いたが、人民は皆非常な謹んだ態度で王様を迎へるのであつた。王様は大得意で、見え隠れに隨いて來た朝臣を傍へ呼んで、『何うだ、此の通りだ』と云つた。

「陛下それはいけません。陛下は王冠をお脱ぎになるのをお忘れでした」と、その朝臣が笑つて云つた。

さて、金持の場合には、金が王冠である。此の黄金の冠無くしては、金持が金持ちとしては認められ無いのだ。

作者はさう前置きをして置いて、その老人の金持ちが、その放浪者の女王の手から脱しようと思つて、警察署へ駆け込んで、自分は桑港のこれ／＼の金持ちなのだが、或る悪黨の女の爲めに誘拐されて、一文無しになつて居る。桑港に居る書記へ電報を打つだけの金を貸して呉れと、一生懸命に頼んだけど、警察では、氣ちがひだと思つて、相手にして呉れず、すぐ／＼立ち去つて、それから、何うにでもして、電報料だけを拵らへようと思つて、女の眼を盗んで、街で乞食をして、少しづつ、金をため、それを靴のなかへ隠して置くといふやうな有りさまを、面白可笑しく書いて居る。

マアク・ツウエーンの『百萬磅の札』といふ小説で、或る貧乏人が、百萬磅の札唯つた一枚預けられたきりで、崩して使ひやうが無いに拘らず、それでも、そんな大金の持ち主と見做されて居たが故に、一向生活に困らぬのみで無く、一文も仕舞ひをすること無しに、金持ち連中と交際することができ、しまひには、その信用で金儲けをするといふ話と、此の金を持たぬ金持ちの老人の話とを對照すると、吾々は金といふもの、力が、今日の如き世間では何れだけ大きいものであるかといふことを今更に明に見せられた氣がして、ひどく面白く思ふのである。

けれども、日本でさへ、金といふものは、甚だ厄介なものになりだしたやうに見える。餘り出来ても、税金として取り上げられる高が無暗に多くなるのみならず、謂はれの無い寄附でも、へえ／＼と承諾し無いといふと、ひどく憎まれて、ヘンな人間に短刀で横切をくられて死んでも、ロクに氣の毒だとも、世間からは云つて貰へない。さればと云つて、金を取ら無いやうにして居れば飢えて死ぬるか、さも無くば馬鹿か、不具かのやうに人から輕蔑されなければならぬ。

これは一體どちらにすればいいのであらうか。

利口な人は、まア困らぬだけ金をこしらへて置くのだと云ふであらう。けれども、その困らぬだけとか、自分の死後が心配にならぬやうにとかいふのだと、その額は一定無い。いや一定し

無いといふことは、めい／＼出来るだけ多くためようといふことになるにきまつて居る。これでは、何處まで行つても、金儲けの争鬭は止みつこは無い。けれども、さういふ争鬭を止め度いと思ふのは、たゞに吾々敗退者の心のみだらうか。

下

所で、政府の方計は、誰でも金無しにいけるやうにしようといふ運動はもとよりのこと、それに関する論議をさへ嚴重に取り締ることになつて居るやうに認められるのだが、それならば各人が安心のなるだけに金をためることを奨励する方針なのであらうか。

それにしては、税金が高過ぎるやうでは無いか。率が可なり高いものであるのみならず、今年などは、殆ど苛斂誅求の形である。これでは人民になるべく貯蓄をさせないやうな方針で、もあるかやうにさへ見える。當路者の考では人民を困まらして置か無ければ、財産に對する欲望が刺戟されぬからといふのかも、知れぬが、財産を持ち、財産をふやすことを容易にして置いた方が、もつと心持好く有効に、財産に對する欲望を起させるもの、やうに吾々は思ふのだが、何ん

なものであらう。

財産制度に動搖を及ぼすやうな思想を恐れる事甚きに拘らず、施政、徴税の方針の上には、財産を作る者を憎み妬むやうな氣分が漂て居るのは、吾々に取つて、甚だ心持の悪い事である。

物價を下げる、小賣り價を安くする、さういふことは誠に結構なことだ。けれども、今のやうな唯だ一方だけのやり方で、さう旨く行くものだらうか、吾々は甚だ疑はしく思ふ。

地主や家主からは、國税、市税といふ風に可なり高率な税金をばまさに誅求的に取り上げる。地主も家主も地代や家賃をます／＼上げることになる。さういふ高い地代を拂ふとか家賃を納めるとかいふやうな商人は、その上、まだ過重な營業税とか、所得税とかいふものを取り上げられるのだ。これでは、小賣りねの高くなるのは、自然だと思ふ。誰にしても、何時までも同じ位置に止まつて居度いと思ふものは無い。誰にしても、向上を願うのは、當り前だ。小賣商人は金をためるなど、いふ量見を起しては相成らぬといふ譯に行くものではない。今の状態では小賣りねの高くなるのは已むを得無い。

小賣りねが高いのにはいろ／＼原因がある。その原因を除き去らざる限り、實際に於て小賣りねの下る氣遣ひは無い。唯だ役人がもつともらしいことを云ひ立て、ほんの申し譯だけの安ね

の市場でも持ちこたへるだけのことである。

所で、今日のやうに社會設備といふやうなことが、官公署の側で頻りに云ひ立てられる際に當つて、吾々の不審に堪えぬことは、此の如き重税を人民に負擔させることである。

此の勢が長く續くならば、小中の財産者は次第に潰れて行つて、貧乏人と大富豪のみが残つてしまふであらうと思ふ。勿論それが自然の推移であらうけれども、階級戦の勃發を促がすべきさういふ状態をば、人爲をもつて促進するといふのは、今日の政府の公表して居る考とは甚だ矛盾すると思ふ。

一體、政府は何處までも財産制度を擁護しようといふのか、それとも財産制度の破壊を急ぐのか、その本心はどちらにあるのであらう。

夏日雜感

一

何の考も無く物を観る故か、時々今まで感じ無かつたことを、何かのはづみでふと感じることがある。大抵は、前にも殆ど無意識に感じて居たことであつて、それを把持するだけの省察が無かつた爲めでもあらうかと思ふ。

春の花の浮き立つた心持よりも、初夏の新緑の落着き掛けた心持の方が、愈に深みがあることは、今まで少しも知ら無かつた事では無かつたのだが、今年になつてそれをしみじみ感じた。

僕の家は市ヶ谷外の堀近くなのだが、この春、花時の或日の午後ちよつと用足しに出ると、麹町側の土手の櫻が満開であつた。けれども、それが奇麗だといふ心持は少しも無かつた。何だか斯うまことにヘンな不自然な物が樹の上にくつつ付いて居るやうに見えて、謂はゞ、何だか嫌な感

といふのでは無かつたにしても、何と無く落ち着き得無い感がしたのであつた。此の頃は、神経衰弱の爲めかと思ふのだが、近眼がますます強くなるので、物が十分に見え無いのだから、一つはそのせいで、花なんぞがさういふ風に見えたのでは無からうかとも思はれるけれども、又、少し考へて見ると、花よりも青葉の方が落着きがあつて、心持がいゝといふ感は、餘程前からあつたのであつて、それが此の頃になつて明に感ぜられたものとも、思へ無いことは無いのだ。

それは兎に角として、事實は、青葉の此の頃の方が如何にも落着きがあつて、心持がいゝ。同じ外壕でいふならば、市ヶ谷停車場のあたりのもう餘程濃くなつて居る緑葉が、黒ずんだ堀の水と照應して、沈靜といつたやうな心持の感を人の心に喚び起さずには置かぬといふ趣がある。元より自然の大景とは比べものにはならぬが、人間の作つた庭のやうなものが、何後の間にか、自然の掌中に委ねられて、次第に自然の懷へ取り收められて行く心持がありくゝと見えて居るところが面白い。

土手の上にある櫓が又なか／＼宜しい。秋の末からの寒木になつた姿の趣き深いのが一番宜いのは勿論であるが、春になつての若葉の形も決して悪くは無い。緑まだ淺く、明るい感のする梢

の間に、宿り木の濃い緑が何かの飾でもあるかのやうに、垂れさがつて居るのは、心持のいゝ眺である。

若葉時の眺めの快いのは、吾々が此の頃度々通る場所であつて、辨慶橋のあたりの堀、芝の公園の丸山を芝園橋あたりから見たところ、同じ公園の辨天池のあたりなどである。

故齋藤賢の雅號綠雨醒客は、坂崎紫瀾の撰んだものであつて、綠雨は若葉にそゞろ雨をいふんださうなのだが、此の頃の風の無い日の雨は如何にも心持がいゝ。沈靜の底に活氣を含み、緑の艶を灰色でほかすともいひ度いやうな、何とも謂へ無い快感が、心のうちに湧いて来る。

一體に、雨は快いものである。雨の音を聞きながら眠に入る心持、雨の音を聞きながら、人と靜に物語る心持、共に快さの限りであるが、今頃の雨の日に、傘をさしてゆる／＼と路を歩くのも、實にいゝ心持のものである。雨の日に傘をさして外へ出ると、何處までもさうして歩いて行き度い氣がすると、有島武郎君が云はれたことがある。僕も全く同感である。傘は日本の雨傘であり度い。足駄も新しいのであつたら、嬉しからう。それで、若葉の眺のいゝ町をゆる／＼と歩いてみ度い。さし向き、牛込見附から四谷見附まで、土手に沿うて歩いてみ度い。

旅へ出た場合ならば、日本傘で足駄で無くとも宜しい。洋服で草鞋ばきで結構である。もう一十五年も前のことであるが、春の暮に、雨のなかを小田原から江の浦まで歩いたことがある。踏行く人も殆ど無く、雨の音と波の音のみを友にして、さまざまな思ひに耽りながら辿つた數里の旅の風情は今も尙忘れ得無いところである。

二

此頃の物で、趣のある今一つのは、蛙の聲である。暮春の頃から鳴き始める此の動物の聲は、何とも云へぬ物寂びた心持を吾々の胸へ喚び起す。闇の夜の堀や、沼から聞へる一つ二つの鳴き聲よりは、水の満ちた田の中から聞える降るやうにとでも形容すべきまでに鳴き立つる諸聲の方が、不思議に寂が多いやうに感ぜられる。更に、さういふ諸聲が夜る深くなど遠音に聞えて來る場合の物寂びた心持は何に喩へることができらう。『地の詩とこしへに盡きず』といふ外國の詩句は蟋蟀を歌つたものであるが、蟋蟀が秋の地の詩であると共に、蛙が初夏の地の歌であることは、吾々に取つては、疑ひ無きところである。

池は潰ぶされ、田は埋められた市の附近では、もう蛙の諸聲を聞くことも、容易で無いであらう。もう七八年も前かと思うのだが、とある夜、若き友と共に、青山高樹町に住んで居た或る知人を訪はうと急ぐ道すがら、或る暗い道に沿うた竹垣のなかで、群蛙の聲を合せて鳴いて居るのを聞いたことがある。今も尙その邸があるや否や、何だか夢にでも見たことのやうな氣さへする位である。それが何の邊であつたといふ記憶さへ定かで無いが、閑を得て、一夜あのあたりをさまよつてみ度くも思ふ。

雨のなかを江の浦まで行つてみた日の前後であつたが、一夜小田原の舊城址の堀のほとり、蛙の聲を聞いたことがある。何の屈托も無いやうなならかな調子で鳴き立て、居たのだが、人の足音でも聞きつけたものなのか、はたと止んでしまう。それで、少時全くの静寂に沈んでしまつて居てから、やがて、何處かで一つ鳴き出す。すると、直ぐも一つそれに答へるやうに鳴き出す。それから、又一つ應じ、又二つ聲を合せるといふ風で、何時の間にか、元のやうに鳴きつれるのであつた。薄月夜の人一人の影さへ無い境に立つて、さういふ蛙の歌に聞き入る心持は、何時でも味ひ度く思ふところのものである。

小田原の外堀はもうすつかり埋められてしまつたが、まだ御用邸の周圍には、内堀が残つて居るのであらうか。今も尙そこでは、蛙の歌が夜々聞かれるであらうか。

二三日前のことであるが、ちよつと用があつて、與謝野氏を訪ふと、折りからの歌の會であつたので、僕にも歌を詠めとすゝめられて、聲といふ字を結びにして、『覺めて知るこれも昔になり』にけり夢に聞きたる苗賣の聲』といふ腰折をやうくのことと呻き出した。寛君からは、夢に聞いたのはもう少し何か意味のある他の聲なのだらうと冷かされたのだが、僕に取つては、苗賣の聲は、都の夏の忘れ難い景物の一つである。大抵は五十位な男の『茄子の苗、黃瓜の苗』と呼ぶ、あの澄んだ涼しいやうな聲は、初夏の來るのを宣する自然の先き觸れのやうな感があるのであつた。亡き母が、野菜を作るのが楽しみで、二坪か三坪の庭の隅へ少しばかりの苗を下して、小さい茄子や黃瓜のなるのを喜んだのも、もう全く昔になつてしまつた。市ヶ谷田町に移つてからは、母が縁日で苗を買つて來て呉れと妻に云つて居たのを覺えて居るのだから、吾々の住まつて居るあたりで、苗賣りの聲を聞か無いやうになつてからは、もう何うしても十年にはなるであらう。

牛込の可なり奥あたりでさへ、庭と云へる庭のある貸家は少くなつたのであらうから、苗賣りの商ひに殆ど無いであらう。何うせ、幾らにもならぬ商ひであつたのであらうから、あれだけで生計を立て、居たのでは無く、ほんの片手間の小遣取り位に過ぎ無かつたであらうと思はれるのだが、あゝいふ小商ひが若し専門のものであつて、長年それに慣れて、それより外に商ひの道を知らぬといふやうな者が、世の變遷の波に捲かれたとしたら、随分悲しい終りを見ることであらう。アナトオル・フランスの小品のなかに、商ひが無くなつてとう／＼自殺する大道の眼鏡屋のことを書いたものがあるのだが、小商人の上には、それに似通つたやうな悲惨事が日本にもあるやうな氣がしてならぬ。

苗賣は吾々の子どもの時分からあつたやうに思ふ。何時見た商人も同じ年頃の、同じやうな瘦た身體の、勿論同じやうな聲の男であつたやうな氣がする。何だか、十年たつても二十年たつても同じやうな年に見える一人の男であつたのでは無からうかといふやうな氣もする。

何時まで経つても五十位で居る男が、賣れもし無い苗を何處かで作り、賣れもし無い荷を擔いで、今も尙、何處か場末を賣つて歩いて居るのでは無からうかといふやうな氣がしてならぬ。金

の實價は兎に角として、何な品でも金高の聲だけは高いものばかりになつてしまつた此の頃、一つ十錢になるかならずの品物を賣つて居る小商人を見る度に、ひどく傷ましい感を抱かずには居られない。

稗時も、此の頃では、賣りに來るのを見掛けぬやうになつたかと思ふ。都では、あれも夏のおとづれの一つであつた。僅に直径一尺にも足らぬやうな土焼きの鉢の中に、新しき夏の清い涼しい野趣を盛つたあの玩具のやうなものが、自然とはまるで没交渉な下町の人々などに、如何に夏の野に對する感興を喚び起したことであらう。藝術と云はんには、餘まりに素朴なものではあるが、こんな敢ない慰みにも、優さしい日本人らしい心持が表はれて居ると思うと、だん／＼さういふものが影を消して行くのを見るのは、如何にも淋しい心持がする。

庭とも云ひ兼ねるやうな方三四尺の空地に向つた黒みに黒んだ縁側に、青々とした稗時の置かれた風情は、今ではもう古い、色褪せた繪になつてしまつた。

三

さまざまな事からだん／＼疎懶になつて、都門から足を踏み出さずに居たことが五六年にも亘つて居たのであつたが、一昨年夏は、病兒を上總の大原へ養生にやつたので、久しぶりで、夏の野と夏の海を見る機会を得た。

塋根の瓦から、埃の道から照り返へす、灼くやうな日光に、眼を痛くさせられて居た者には、汽車の窓から見ると平凡な田野の緑も、全く祝福として迎へ得られるのであつた。いや、それどころか、龜井戸あたりの工場の間、家鴨を飼ふやうな、雑草に囲まれた堀とも池ともつかぬ方敷間の水溜りさへ、それ自身の豊かな詩趣を持つて居るやうに思はれて、ひどく快いものに見やられたのであつた。

上總の村々は、東海道のやうに文明が往來した街道では無いのだから、全體の氣分が餘程舊體を脱して居無い。毎週一回行はる、市の光景などは、如何にも鄙びたものであつて、東海道殊に東京近くの大磯、小田原などではとても見ることでき無いものである。

賣られる品は大抵野菜や果物が多く、その間に古着とか、鹽魚とか、玩具とか、菓子とかいふ位の店が各一つ位出てゐるのである。どの店も、皆地面へ席を敷いた、昔しながらの本當の露店

である。可なりな人込みであるが、大抵はその近在から買ひ物に出て来たのらしい女連が重である。二十前とか二十そこ〜とかいふやうな若い女は、餘り見掛けられぬ。大部分、三十位から以上の色の黒い如何にも健康さうな女房たちで、それが裾を高々と端しよつて、如何にも堅さうに肉の締つた下脚部を露出しにして、藁で造つた楕圓な籠を背に負つて、二三人づつ連れになつて行きかつて居るのだ。籠は物を入れて運ぶ爲めであるのだが、大原あたりの女は、可なりな年寄りでも、随分重い荷をその籠へ入れて、運ぶことができるやうである。

文明の利便も、流行の花やかさも、一向眼にも入らぬやうなそれ等の女たちの一生も、確に氣の毒には相違無いが、都會の女労働者などの、太く不健康に見えるのに比べては、まだ前者の方が人間としての幸福を持ち得て居るやうに思はる。

勝浦へも二度程行つてみたが、此所では、一番重なる町らしい通りの道端に蓆を敷いて、野菜だの、果物だの、茸を賣つて居た。極まつた市日といふのは無くて、毎日さういふ露店が出て居るのでは無からうかと思ふ。勿論、露店の數は大原とは比べものにならぬ程少く、従つて、買人も一寸とは見掛けられ無い位であつた。

天景の方から云つても、東海道のものよりは餘程ワイルドである。海岸は、茂原から大原までは、大部分砂濱であるけれども、大原から御宿までは、矮草のところ〜に青んで居る岩山の連なつた斷崖、絶壁で、濱と稱し得べきやうなところは少しも無く、海岸に沿うて行く道は無い。月の末であつたが、子どもを迎ひに行つた序に、岩船の地蔵といふのへ行つてみた。村は山を越えた——隧道を抜けた——彼方の海沿ひの謂は、艇戸の一簇で、休み茶屋の縁臺の黒すみ加減や、家の煤けた様子や、憩んで居る客の風態や、何處か近くの村からでも參詣に來たらしい若い娘たちの服裝など、如何にも田舎々々した鄙び方であつた。地藏堂は村の中程から海へ突き出した岩山——寧ろ岩——の上に立つて居る。大海の波はそのあたりを繞つて、鞋踏と、花と散り雪と碎けて居る。一體の氣分が、もう三十年も前に一度行つたことのある南海の漁村のさまが憶ひ起されるものであつた。

勝浦灣の景色はなかく〜い。八幡山の岬端に立つて西南に面すると、興津の方の岬岬へ、紺碧の灣が、白く縁どられた幾つもの圈をなして寄せて居るさまが、夏の晴れた日だと、何とも謂へぬ涼味を心に喚び起させる。小島一つ見えぬ漂渺とした大洋の眺めは、餘りに大きく、餘ま

りに淋しくして、一人旅の夕などには長く見るに堪へぬ心地がする。吾々には、矢張り、遠方に山あり岬ある海岸線の見え渡つて居る景色の方が、親しみ易い。その意味で、熱海街道の吉濱あたりから先の景色を僕は愛するのだが、勝浦の景色も、對岸がや、近いやうな感はあるもの、それでも、山の翠と、遠方の磯屋の屋根が晴やかな陽光に輝いて居るさまはなかく、繪畫的である。

勝浦と御宿の間の路は、大部分海に沿うて居る。直ちに海に附いて走つて居る低丘の裾にあたる崖が道になつて居る形であつて、脚下には大洋の波が逆捲き寄せて居る。

ところ／＼で見かける磯の岩を切つて作つた餌の生洲も、吾々の眼には珍らしい。平たい大岩の面をさながらに幾つもの浴槽のやうに切り鑿つて、それへ鏝を釣る餌の鯛を生けて置くのだといふ。その洲には碧々と海水が堪えて居るものもあるし、また瀧のやうに波が打ち込んで居るものもある。其所を通つたのは、秋であつたが、その浴槽のやうなもの、權とも見えるところに立つて、釣を垂れて居る三十恰好の赫顔の村人があつた。

浴衣一枚で、身になごり無く陽光を浴びて、廣々とした野邊なり、海邊に立つのは快いもので

ある。夏の日を恐れ無い人は、勝浦御宿間と云つたやうな、海沿ひの道を歩くのも一興であらう。

孤蝶隨筆(終)

大正十三年十月十日印刷
大正十三年十月廿日發行

孤蝶隨筆

定價金二圓

著者
檢印

著者

馬場孤蝶

發行者

東京市外日暮里町谷中本十八
佐藤三郎

印刷者

東京市牛込區長延寺町大
織田小三郎

發賣

東京日暮里谷中本十八番
振替東京神田區錦町一の九番
東京日暮里谷中本十八番
振替東京神田區錦町一の九番

新文
行作
社社

(大杉印刷所印行)

〇〇辻潤著〇〇

ですすべら

四六版三百頁上製
定價金壹圓八拾錢
書留送料金拾八錢

『ですべら』と云つたつてアンペラやウスツペラの親類ではない。己れのボンクラと無能とに食傷した自稱ダガイストの文集である。丸ビルやマルクスを知らないでもダダを知らないことは毫も諸君の恥辱ではない、ダガ明日の生活意識はダダに熟してゐる、経望の奈落から出産した愉快なダダの福音を聴け！ (著者)

内
◇ですべら ◇ダダの話 ◇ぶろむなあどさんちまんたる ◇文學以外 ◇らぶ
そでいや・ほへみあな ◇あびばつち ◇わりあちおん ◇ふもれすく ◇陀々羅
断語 ◇享樂の意義 ◇きやぶりんすぶらんたん ◇ぐりんぶすDADA

發兌

東京市外日暮里谷中本拾八
振替口座東京四參八八七番

新 作 社

〇〇佐藤惣之助氏著〇〇

蠅と螢

四六判三百八十頁上製
定價金壹圓八拾錢
書留送料金拾八錢

本書の中には著者の拾年間も日の光を見なかつた感想、日記、旅行記、スケッチ、小論、隨筆などがあつまつてある。詩に現はれた著者、又現はれぬ他の方面の著者が躍如としてゐる。

内
□昨日の快樂 □二重の夢 □詩中の鬼 □冬の書 □過激に酔へる藝術 □野外手帳 □川原
□草の忘れぬ南方植物 □海に入る者 □相模の半原 □習作雑藁 □句 □風王 □道路に就
□詩的幼稚な抗議 □實際の古事 □俗人の飛行 □俗人の眞夜中 □妙な朋輩 □老婆考
□世語集と自然の一篇 □新崎の悪魔の六號雜筆 □日常のことも □或る時の考へ
□雜録 □一頭の鬼語 □少々 □災禍の上の讀後 □月を吹えるを讀むで後
□座談 □十年紀行 □琉球八重山諸島紀行 □戯作偶感 □歌劇についての感想
□盤梯山紀行 □詩壇に少々 □惡魔の六號雜筆 □日常のことも □或る時の考へ

發兌

東京日暮里谷中本十八
振替東京四參八八七番

新 作 社

松崎天民先生著

好評 六版

四十男の悩み

四六版五百廿頁假製
定價金壹圓九十錢
書留送料十八錢

四十男の悩み―さうだ、誰しも一度は辿らねばならぬ人生の峠路に喘ぎながら、著者は先づ自分自身の姿を見た。同時に世の中を見た、都會を見た、田園を見た、女を見た、苦しい生活の痛みを見た。こんな平明卒直に、こんな面白く、人生の實感を記録した本が、ほかに有らうとは覺えぬ。隨筆の風味もある、感想録の気分もある、然かも全體を通じて、一家のヒューマン・ドキュメントとしての強い實感である。その交情いよ／＼圓熟大成して、一家の風格を具へ來つた著者が、甦生の世に問ふ最初の報告書である。

發 容 内

- ◇四十男の悩み
- ◇禁酒してから
- ◇神經衰弱の頃
- ◇九死に一生を
- ◇酒から寫眞へ
- ◇東京の折々
- ◇東京の十五年
- ◇東京を謳歌す
- ◇東京に住む者
- ◇新聞人の苦惱
- ◇新聞よまひ言
- ◇一記者の復命
- ◇人間世の回味
- ◇故郷の思ひ出
- ◇友人一家の死
- ◇郷里の友人へ
- ◇吉原遊郷の事
- ◇千日前と淺草
- ◇生活その日頃
- ◇或る年の記録
- ◇歳末そよ言

東京市外日暮里谷中本拾八
振替口座東京四參八八七番

新 作 社

岡本綺堂先生著

十番隨筆

四六版三百二十頁上製挿入
定價金 貳 圓
書留送料金十八錢

綺堂氏の作に就いては今更ら贅言の必要もあるまい所謂「綺堂もの」として常に讀者の推賞してやまぬ處である。殊にその「隨筆」ものに練熟せる文藻は何とも言ひぬ「ウマ」の原稿を焼失した中で、唯わづかに免れた短二、三編をあれこれ、一種の記念のため一切の隨筆集をなしたものである。紀行もある、その評論や考證もある、多種多様な味の小品もある。花下綠蔭の好讀物として、世の讀書家にこの一本を薦めたい。千紫萬紅の觀を呈してゐる。

發 容 内

- ◇葉櫻まで
- ◇栗の花
- ◇ゆず湯
- ◇秋の修善寺
- ◇春の修善寺
- ◇ランズ紀行
- ◇火に追はれて
- ◇昔の東京
- ◇夏の旅
- ◇修善寺
- ◇秋の長壽日記
- ◇時雨の頃
- ◇布哇短信
- ◇島原の夢
- ◇明治以後の黙阿彌翁
- ◇三人吉三
- ◇維感
- ◇竹本劇
- ◇人物研究
- ◇人形の趣味
- ◇鎌倉時代の新聞
- ◇叔父と甥
- ◇米國の松王劇
- ◇ウルウオースの死
- ◇新聞があつたならば
- ◇助六の身

東京市外日暮里谷中本拾八
振替口座東京四參八八七番

新 作 社

エ 3B-44

岡本綺堂 半七捕物帳

好評 八版 第壹輯

内容
◇お文の魂石燈籠湯屋の
◇二階の春の雪解の猫騒動
◇化師匠の筆屋の娘の帯取の池
◇朝顔屋敷の勘平の死
上製布装箱入 價貳圓廿錢
送料十二錢

好評 七版 第貳輯

内容
◇雪達磨の山祝の夜津の國
◇屋の半鐘の怪辨天娘の廣重
◇と河瀬の奥女中
上製布装箱入 價金貳圓
送料十二錢

忽ち 五版 第參輯

内容
◇半七先生の化銀杏の鬼娘
◇少年少女の死の雷獸と蛇の狐
◇と僧の旅繪師のお照の父向
◇島の寮
上製布装箱入 價金貳圓
送料十二錢

發兌 東京日暮里 振替東京四三八八七番 新 作 社

谷中本十八 振替長野三〇九三番

終